# 都林泉名勝圖會　二

都林泉名勝圖會巻之貳

目録


赤山社 香水 金神社
什寳
義政公御式目
氷室古跡
吉田山遊宴
南禅寺 方丈什宝 虫干儀
藤在衡公別業蹟
聴松院 荼枳霊夢松 勅使石
牧護庵
南禅寺湯豆腐店
陽成院陵

慈照寺 東求堂 茶の水井
東山殿御會和歌
河合納涼
中山忠親公旧蹟
西翁院反古庵
南禅院 心字池
菩提樹院址
同瑪瑙記 瑪瑙水鉢
金地院 開山堂 弁天社
知恩教院 方丈 説法石
冷泉院陵

銀閣圖
集芳軒
惺窩先生幽居蹟
卜部家齋場所
光雲寺 瑪瑙手水鉢
亀山法皇古墟
寶荘嚴院址
歸雲院
白河離宮
御忌祈祠
後一條院陵

粟田院
圓山
端寮花洛庵清阿弥
勝興庵正阿弥
皇太后妍子塚
高臺寺　開山堂　小方丈
祇園社
祇園御輿洗盥物
巌阿弥　長嘯梅

青蓮院
多蔵庵春阿弥
多福庵也阿弥
将軍塚
長楽寺
双林寺長喜庵　方丈　遠州好茶屋　菊渓
霊山叔阿弥
下河原女伶會

大谷寺
延寿庵連阿弥
長寿庵左阿弥　織田道八墓
上東門院塔
蔡華園院　西行及び頓阿旧跡
傘亭
文阿弥
珠阿弥
正法寺




赤山社
言水

**赤山神祠**（修学院邑の西の方にあり）いにしへ僧の安恵慈覚大師の顧命に依て西に社を建る（元亨釈書）社頭の林泉玲瓏として特に閑寂なりし　官家より修補ありて神殿壮麗となる（世に将宅の附当社の神札を受て家々に張るハむかし慶士の天台山を擁して比叡山に伽藍を建立し王城の鬼門金神の守護としたまへる由縁也）

**慈照寺銀閣**ハ足利義政公の別荘也（浄土寺村にあり）東求堂の中央ハ相阿弥の筆の花鳥也数寄屋四畳半其中の違棚の張附梅の画ハ古法眼の筆帳台の腰障子琴棋書画の図ハ狩野永納が筆の蘭水仙ハ相阿弥の筆也東間ハ義政公薙髪の木像を安す延徳二年正月七日に薨じたまふ慈照院殿准三宮喜山大居士と称す（台齢五十六）此間の竹に若松ハ相阿弥図し方丈の中の間ハ海に友君の仙人尽し東の間ハ逍遥軒の山水也西の間も山水なりしかども狩野隆也の筆襖ハ土佐光興屏風ハ相阿弥の筆芦と薄に金銀の砂子を濃ちらして希代の名筆也

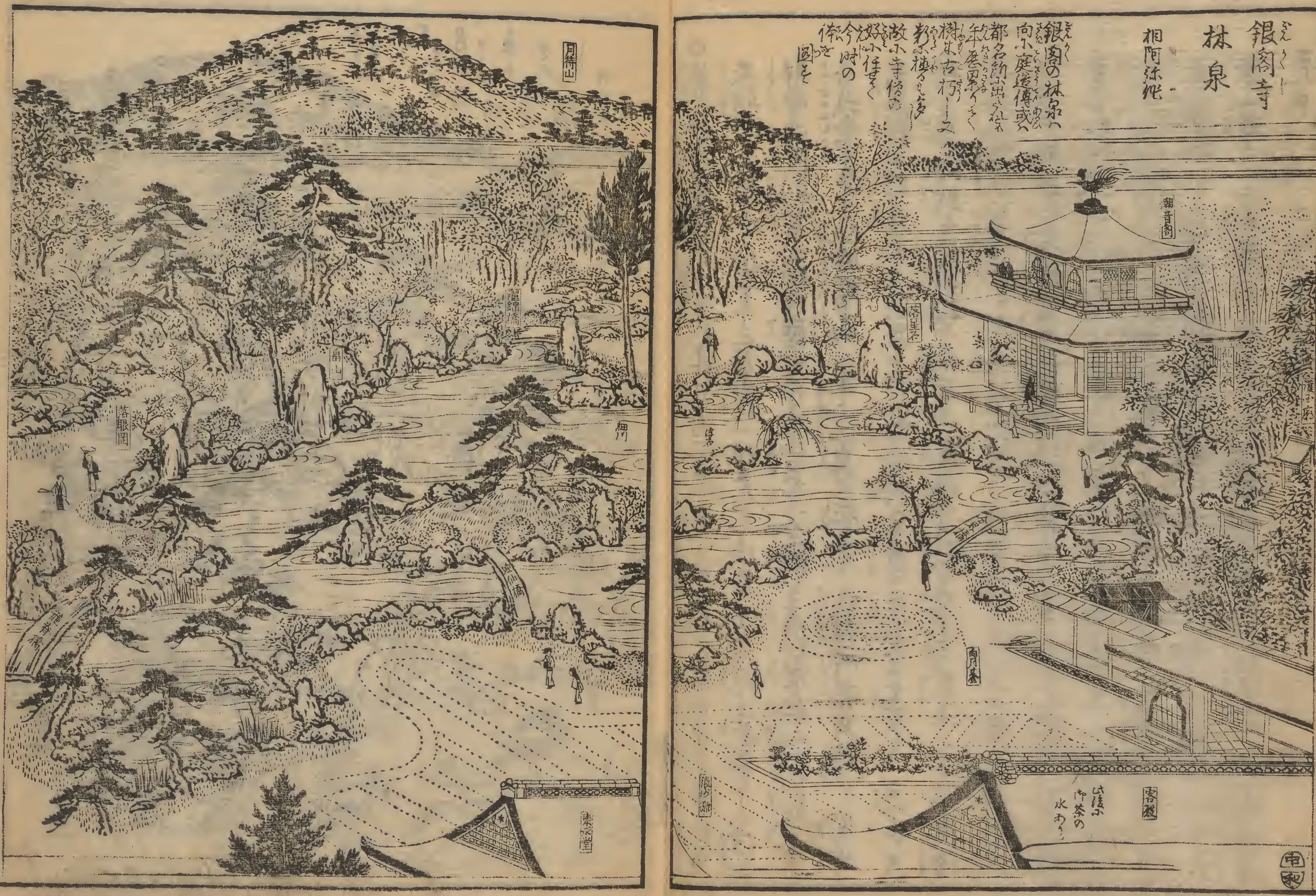
**集芳軒**（堂後にあり近世の造立也維明和尚の梅呉月渓の画あり）**茶水井**（東求堂の北にあり沸泉の流是東求堂へ通ず）

○足利将軍義政公ハ永享八年正月二日に誕じ宝徳元年四月廿九日征夷大将軍に任じ享徳二年三月に従一位に叙し同年十二月源氏長者として淳和奨学両院別当に補す応仁元年山名宗全威を振ひ管領細川勝元と合戦止事なし此時勝元ハ主上上皇を迎まゐらせ三種神器を擁して室町花御所にあり将軍家ハ勝元を捨て意を宗全に寄す　天子を挟て日々闘戦をなし此騒擾に南禅寺相国寺及寺院多く焦土となる其外洛中洛外諸侯貴臣家等兵火に罹らぬ事なかりし是を応仁乱といふ此時本朝旧記諸家文書兵燹に焼亡紛失せる事数しらず同六年大明国の勘合符を求む応仁元年より十一年まで諸大名みな其領国を守て割拠の形勢あり尚山名細川の徒洛中に対陣す将軍を足利義尚公に譲て東山慈照寺に銀閣を建て古器名画を翫び芳茗を喫して幽棲し世に東山殿といふ延徳二年正月七日前征夷大将軍従一位准三宮源義政公薨を（年齢五十一）太政大臣を贈らる

# 銀閣寺林泉

相阿弥作

銀閣の林泉ハ向ふ庭造傳或ハ都名所ニ出られ年歴ひさしく樹木古朽し又新ニ植るも多し故ニ寺僧の好ニ任せ今ハ時の体を図を






東山相君茶泉碑

東山相公嘗好茶事東求堂後園五十歩許有泉今猶存焉乃其所嘗汲云極清潔大旱不涸也呉田北渚吉敬仰止遺蹤屡来寓寺朝夕把注以充雋永之賞因立碑其側表焉使余紀之銘曰

匪深匪廣　雲芽之賞　千歳是同
侯盈侯冲

寛政八歳丙辰春　前相國寺蕉中顯常撰并書

慈芳侍友　右同敍

ゆかしくも東の山は禅寺にて川風の聲をきく人
そのかみ名よりある寺　おもしろく
ちりてあれはてもしらん古寺はわれの志のいはねそかれぬや

吉孔東翁設茶讌於銀閣集芳軒一日与諸客應其招席上賦贈

開爐邀韵客勝践與逾嘉厨辨遂巡酒筵寛自在茶池臺猶覇跡宗祏付僧家讌罷還思古霜林錦繍奢　六如慈周

東山慈照寺にまうでゝ旧跡をたづねしのちの茶の席に会の日中かうぶる

この庭はうつし世のこゝ秋の色をかりえて冬の霜にとひける　慈延

茶といへとおかしくもありて

世の塵をうれもつもれくの如き心もちて涼しき山は下庵　金子義篤




時余執務在萬年山因及此

松寺此歸日已深山色秋閣中紅葉映池上白雲浮
意淡圖三幅情濃茗一甌幽期曽不負清靜與君遊

慈照寺新州

吉田孔夷見邀于銀閣精舍
待以茶式小詩以謝

紅楓綠樹夕陽明銀閣風光画不成
更有相公留勝迹好逢幽士弄餘情

台洲元凱

呉田吉處士設茶讌于東山銀閣見招

覇圖閣古倚崔嵬沼苑竹闉人迹稀丈室馨香薫薫
帳壁間画影映山扉石爐茗瀹紅烟動楓樹雨煞白
日微朝埜何妨同臭味到今風月仰光輝

畑維龍

遊慈照精舍謝北渚雅士饗茶

台麓之西鴨水東傑然銀閣出琳宮珊珊洗月泉千
尺裊裊拂雲竹一叢巌恠虎頭蹲草裏橋斜龍背臥
池中愛君來此能延客茶味殊非世味同

雪樵道祐

過慈照寺尋道可居士不遇

孤節紅葉徑寂寞鎖山房猶餘石鼎火
使我玩遺芳

蕉中竺常

濯錦橋

冬されハ岸のもみちをちらし落てふしきと濯ふ橋の下水

吉田致

あんとうたおんうこにきてすゝむてゝろ
寄和泉に意といふことを

夜中に月見せ侍く おかりふをみち泉のやつくらに行まさらん　おほんしゝ

今やは刀自のうことうりやまちれ秋忘とふやる
その後りこし名附よとて泖ひぬる　也名

本の葉ちる秋まれおらしふ深さありて打まくけきもちかくともうか　おほしく

綰柳

むまとひてしやふくるのいとれきそれさへ又春ふ善れきとうし打かとも　おほしく

覓泉

くちぬとも又もかけひのよそこまで同しところれ人やくまなむ　おほしゝ

東山相君泉 呉田老居士新建碣
使余銘之尋有點茶見邀之約
賦贈之
道是相公遺愛傳勞君此日認山泉
佳期更在清秋後一鼎松風邀老禪
八十二翁竺常
萬歳千秋好此傳林間建碣相君泉消
水脈終無盡洗却塵勞打坐禪
次蕉中尊者見贈吉道可居士韻以謝居士
造碑
東山新洲周鼎和尚艸

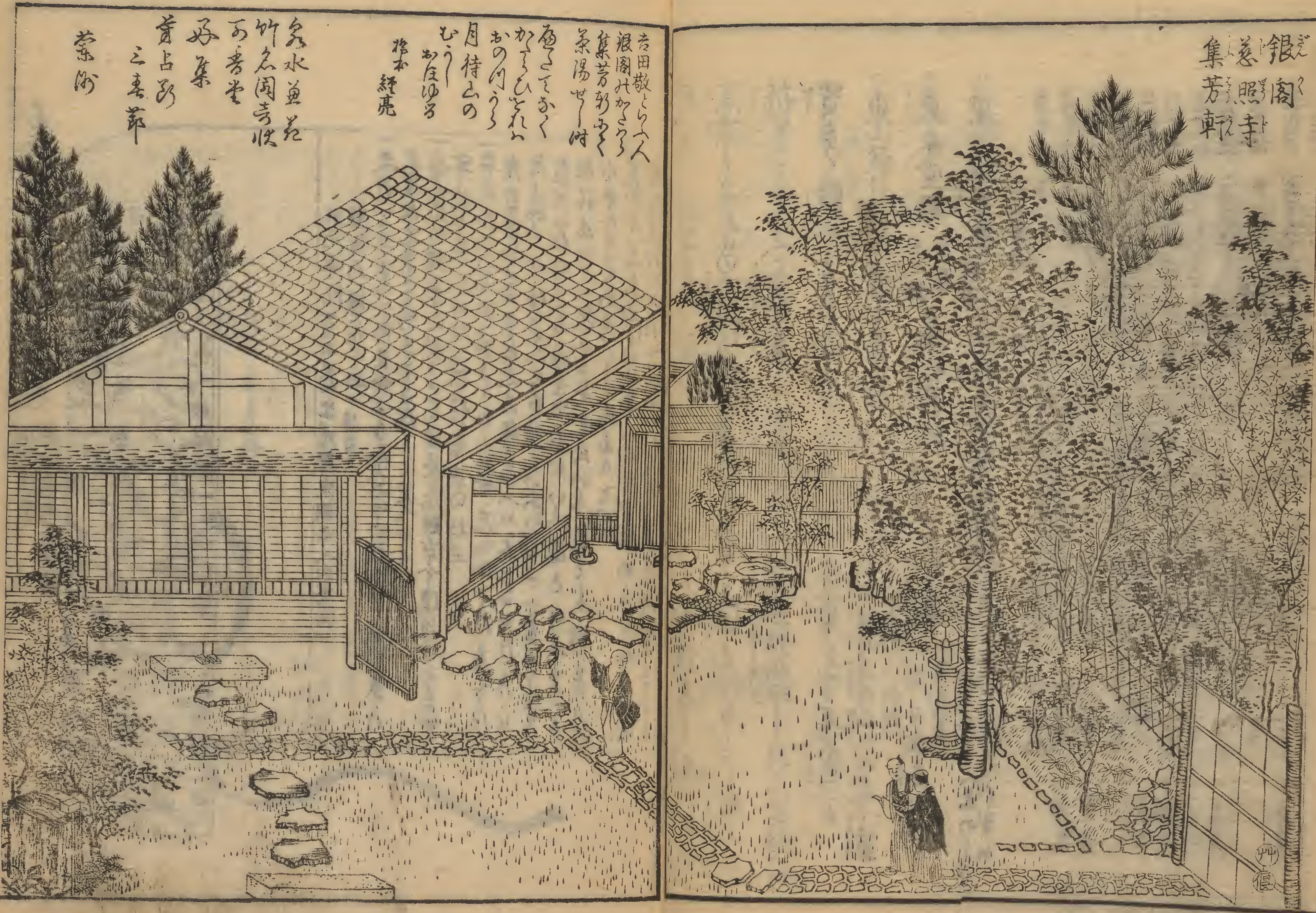
原當山ハ將軍家の山閣なれど莊嚴ふりて封境廣し應仁の亂ふ
荒蕪し又天正の末迄ハ龍山公豊臣秀吉公と御中不和ふして龍山公ハ
筑紫へさまらへ三衆と應て帰洛しめ後まで此姑幽棲し給ふ其時什
寶多く離散しきもさぞ侍えし今傳ふ寺寶とある其ハ品目ふ云

○東山殿月見御會十首和歌　左ふえんゆ　○硯筥　銘布留野　蒔繪和州布留社圖　東山義政公の所お
○東求堂額　東山殿　眞筆　○同仁齋額　同筆　○七賢盃　七盞　有銘　七賢書名　悉竹林
○東山殿家集　抜書　○唐物朱塗蒔繪膳椀　五十人前　希世の名器也今十人前あり初ハ五十人前ありしが天正ふ散亂し

東山殿月見御會十首和哥

月前煙　君のなこふひろうふきゆるぬしの深れ笋ふうたゝ、そ月ふなえきぬ　量光
月前鴈　めくりわふ雲ゐをちらうふこたゝくしきやこれ月乃ころもかりかの　公兼
月前虫　露ふうたふ葉のねかなきとりさゝくさゝや笋虫月ふむしそ鳴ある
月前鹿　大納言典侍　月みえてそいわく深うき丸老ゝ身の秋まの友とや鹿もなく鶏
月前鶏　身かしむろ世の世の露ふ月源ふあ多くやう淋ろのこころ乃秋風　義政
月前晴　どの門からわされへどの淋ふ急て月ふ秋らく志さのちの心あれ　道永
月前鐘　おやとこの月うこぬ笋は神うえの杵へ淋あとうや教う志まるらん　季經
月前猿　月えはくうくさ冬て杵分つひしら山ふ悔しらやきえておと猿かきらむ　元長
月前煙　眞乘寺宮　みうあつひぬ月をむ秋そのかゝのゝまみけゆく秋の雲ふ志ゝくまさく
蕭寺月　月そふ松の本れまふ秋みえくめくろ横河のみ乃よきさ雲　光胤

銀閣 慈照寺 集芳軒

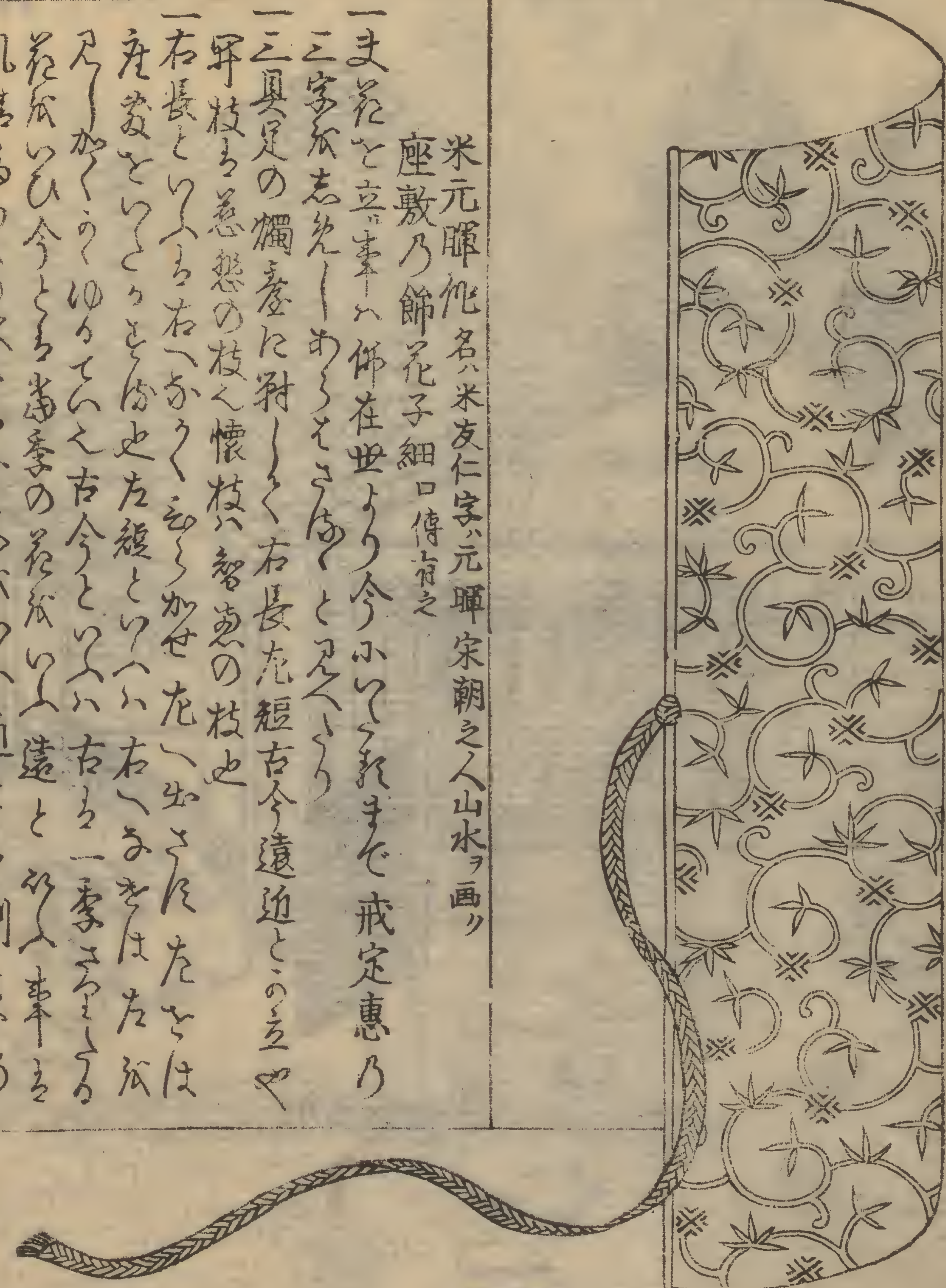


吉田敬といふ人
銀閣にかよひて
集芳軒にて
茶湯せし時
更るまでかく
かたらひそれに
おのつから
月待山の
むかし
おぼゆる
梅本 経亮
泉水兼花
竹名園古状
可尋堂
好案
菅占郎 三喜節
案洲

義政公御成式目 壱巻

桐阿弥筆

巻物表具茶地錦



米元暉作 名ハ米友仁字ハ元暉宋朝之人山水ヲ画ク

座敷乃飾花子細口傳有之

一まゝ花を立る事ハ佛在世より今にいたるまで戒定恵乃三字に志たしあらそふ事なしとみえたり

一三具足の燭臺に對しく右長左短古今遠近とこの立や野枝ゟ慈悲の枝ゝ懐枝ハ智恵の枝也

一右長といふは右へかうくなかせ左へ出さんたさは左を長くいふとを作也左短といへハ右へ多きは左な見しかくうくゆかてハ古今といへハ古ゟ一季さるへる花なりひ今とゟ当季の花なりい遠と近て事る風情あるくみえるを本なりい近とる副菜乃水きハよくありくと志あるさいふ

一花の本なる心といふ事ハ人も万縁ありといへとも心定まるへし此異其如くに花も本性よくなさる

一つ禅義なりきて本来なる志んといふハ心よく済まり

一公方様御成の時押板に三幅對三具足香爐匙火箸の臺香合なり卓の上に置也足なし三ツかさりといふ並べ換て中に香爐さうまきあり志ゝし此臺まへに香合右に燭臺左に花瓶此時の花ハ燭臺の鶴に對をなさく右長左短の花て揺ひ脇花瓶ハ繪の前にりかけ卓なる並ゟ其上にそへく左の繪の前の花ゟ右の脇花瓶のたとう車て右長左短とて立也又右の繪の前の花ゟ左の脇花瓶の花なうけく左長右短とて立也脇花瓶の花ハ心当季の花て揺ひ

一五幅一對をかくる事ゟ口傳大事ありて秘之云本尊の前の卓も五ッ餝りと云事有是鶴臺二又花瓶二ッ中の三ハ同前鶴ハ内にあり花瓶ハ外にあり此内といふに二説あり口傳也鶴によくむかひ餝るをハかゝるべうるに

一脇繪定四季の繪あるへし掛るハ春夏秋冬と東より志めくて掛る

一何れの上にハ卓を並さる事也（卓も置かぬ時ハ…）

一盆に花瓶をおくべしおし板にハ花梨の卓なるをくべし（くわりんにかきるへからず ほかさんにてもあるべし）

一茶碗のいは花瓶をちやわんの臺にをくべうるい盆と卓又霧盤なとはをくべし

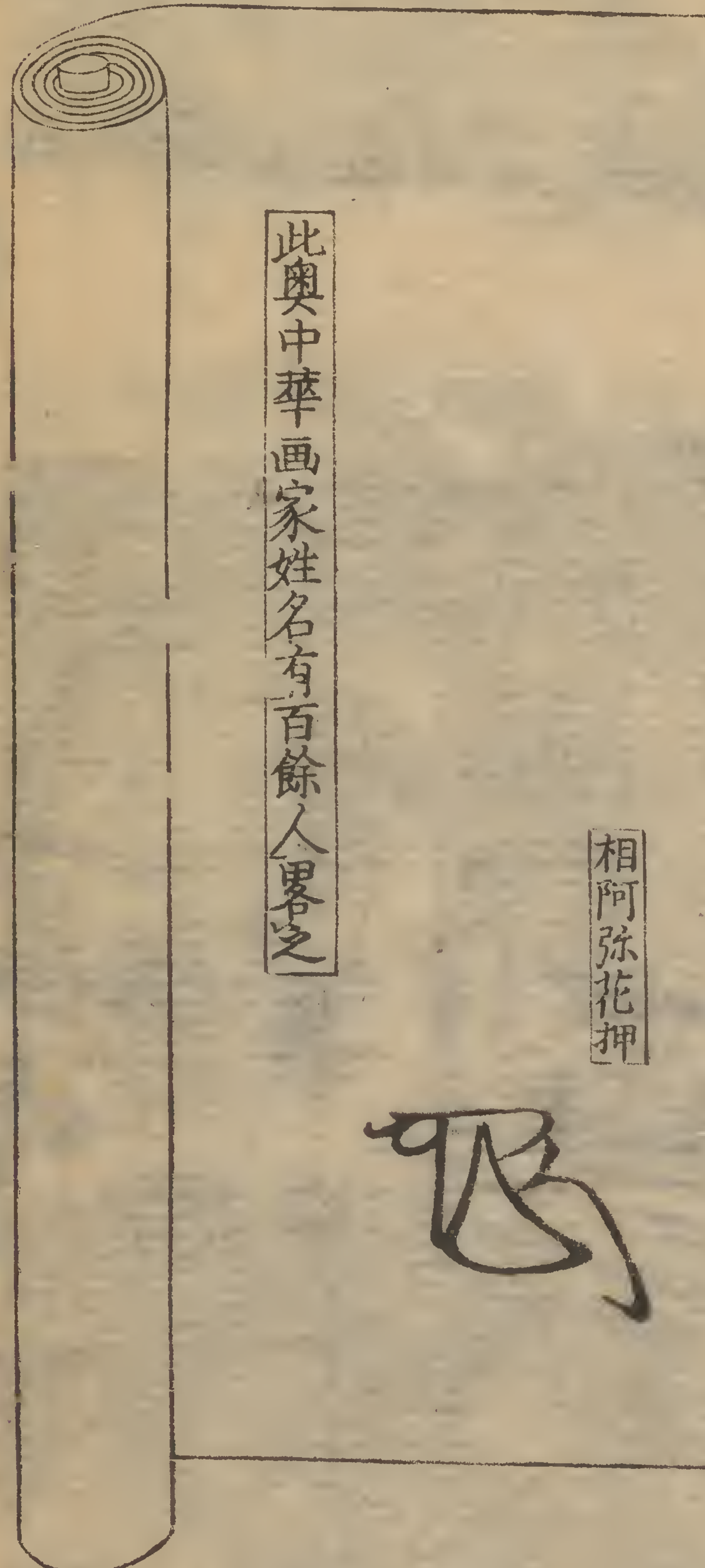
一香爐のそんは五にも六にも多くおくへし足なは西にむくべし順におきて口傳あり

一方盆にハ右に香匙火箸臺中に香合左に香爐と

さく也
一右の鉢に花入れ置くハ下にて並押板にても右の品れ
尾ニよりて花ニ対しさくさく也又一物ニても
押板の中ニ並也
一違棚ニハ聞香爐を並が本也其外の物ハ志の儘
置たり一つニ見えもうひとさくさく置し食籠一酒の
入物一盃一茶碗の物あるは香枝の物一菓籠
箱一つ湯一壺一如此物の数皆九合而
て置様く色紋も黄赤白黒とて並之
一ちかひたれの立花ハ二分れちかひのごとくにて立也
細口園筒れ風情ありハ中の棚ニて置く又双花瓶
木ハ下の重ニ立へき也
一柱花瓶の花も下れ花ニ同前さりながらかゝる時ニ事
おゝきなるかゝりおり後くべし
一御祝と祝言の花ニハ深山木花を枯枝なとて禁じ
菓れ心の花ニハ木の枝をそへ置くら次野乃新
ニミくに写 祝云ニもつき
一花瓶の花ニ花瓶のをとより下へ落ちる物も
去のむべからす禁忌すべしいかにもわろし
一三具足の香合ハ口二寸なりまりニハの義也
一風動のやうとはる事ハ押板の角柱の四分半の面に
伝ふ所打へし繪の中置りのとなり琴の糸也
一押板の高さハ敷居より八寸但一尺半ある八七寸又ハ分之
かゝるさきて尺八七寸之
一柱飾の釘ハ落掛しより五寸下也大客殿ニある間
茶かけれ書院又ハ小座敷の物也
一風鎮ハ屏風ハ掛物の両ノ末ニかくる也日本ニハ広様乃
天井をもかけ又客殿の中央の卓の上にも掛
又ハ押板の飾れにもかけしたにもかけ
一火鉢しきハ押板の飾又半写押板の飾 佛前
ニもくに掛く
一喚鐘ハ書院の天井の中程に付る置之
一茶の湯ハ 公方様の御座の間ニ御目のかよふちかく
ニ仕たる本也 御出ましくハ引き納を付るこの
本なり
一盆れニ盆と並付ニ建盞と臺ニ香置くさたにさく
茶道ハ右ニ茶筅左ニ壷中ニ茶酌と並也
一うかひ茶碗を臺にすへくいれのごとき物ニも付事
あり又建盞を一盆ニ入て臺ともに一物ニさく
事も作
一草の心ニ木を挿す事古今の奇ニ
夏山の菓乃落葉を挿すられけるが
春見し二松人しるの時ハ
此奇の心をすへ附る其心ニよくよく勢し也挿
すへしとて置く
一花の枝をまう後事ニ忌事おほくしめたをとし
の枝とかく同じ所ニまる枝をしむつさえ是る
人のきるあなたニわかにわろくしなをさ所
枝とかく面へさし後枝是又主人を写す忌也
菓も正面へハちかひのぜぬ事之又同菓を前方
へ同じ処りニなびかせる事もわろくし又十文
字の枝とかく忌へしきれハ本木のやさきニよくく

枝のさしよう附其より成つきにそへ葉をそへくに花に
させて十文字に見ゆる事わろし
一かさねの枝と云ハ本木の枝にそへてたがへる枝の脊附其下
葉にかさなる葉木を立るなと云あしく成て忌也
一右長左短の花なれハ右への副葉なるべけれハさせハ左への
そへ葉流枝などいてし心思程面白し
一左長右短の花ハ左へ出る葉開てなかきを右へそへ
葉いかにも一段に心のうしろへそへ葉立る為の
おもしろし
一花瓶の口ちかく見れハ出る葉花瓶のかさりのひ
てちかくゆ面白し又花瓶の口ちかくある時ハくち
のきハよくちかくてよし
一本木のなかきする事あるへしちかく立する心をなくへ
させて立るたゝるなかき足しする木を立るにあり
かけする花ハなかき所にて親木を二本立て出く
葉を仕るか本なり
一祝言の花にはうちきり松とて松をうり立る事皆
これハ其本立ち為るに枝の五方へさしわたすなかく
うしろ端るを面へかしこく立るにあり
一若松枝と申ハ面に嫌ふへるなかいむへき之
一双花瓶に心一さけ出しく高くみゆるにたる
馬蘭をさしたる木の物など松の外に高くこの立也
一凡かきつし花へうつらく心をたるなり
一二心とりよハ花瓶のどうぬとくしらく菊かたはをさ
仙翁等などの為にかみ物一つかさ立くるにほようく
く附二本あるへく立くんなれといふ流る花瓶にハ
あるくかうに
一か寄入花と云事ハ舟花の事也
一花といふと云事ハさいろうの中にある物を花か
いけいといふ壁山にある鉢にて入るなり
一双花瓶に本が立る事座に本がうゆるかさてあに
先つ心をたてゝ其後て枝足うにそへ葉あるへし
一双花瓶に葉花を立る事ハ澤に葉の生するをとりる
ごくに立るへし
一花瓶に本尊の面の向まへ住まくまくわひ寄らく
て立也
一副葉ハ本木のなかの殊き時其なかくか加へを中うに
そへてさゝえ又その副葉のなかわろくくらてそれに
副葉とて副也
一葉も木も出来くある物ハ出きて高くある物ハ気ひた
心がりらく立へき也是に口傳おほくしかくとのる
ありぬへし
一よめとむこへいふにハ花を立る事之是ら花と
地よりよいかくえしく男にそゆるか心に立いの
本也
一毎事祝言よは松を立るか本之物の色が四色み
位心ふぬ事花四瓶立るぬ事也
一心に風の枝ある附る副葉にも風の出て流ある
為し掛絵に風あるは其風にそうにふうをへた
事不然く書院又ハ窓なかのあつうさよりの風
の入るる為うにて立也
一当季の花が捨く別の心が立る事 ２ いつく

あら事なくし只其時の季の花を本に仕立て
きゆゑはそれなくさげはるかにまでしゆゑよくば申
楽の志ても笛を吹き謡ならひはくもなきやし
さて其志ても面白くみをる處にて立る
体也
一 心法らた時は草木まく法らく心底さしくは
瀏草まくやさしく立つべき之
一 心さは物にしたに寸のをりふ之 草木ぞ人よく
く人寄の上の句に嘗の聲かなり芳は露
きえぬと云處に本木を寸りして下の句に
山さとへいりて甚かしら侍しとはく心に草
木ぞそれ之
一 法らた本木ある時る古寄に
ものゝ婦濃やまとはくらべとての上に
あられ多もし侍る次の志のぞら
ぞいふ志ろに何處たる本なりたく花瓶
よく見て此花瓶に何いる處りたて立世らんや
あんしらく、たゝみを侍して立なり志の
いされを能く見て初心を忘る次あくらし資
あて法をもて寺人の面にて志のとあ侍る十瓶
百瓶あらん百瓶ありて所に鼻のあり何所處き所に
目に有りあなた處に所に十瓶あらんは十瓶
ふ口の何に世らなしく法をりにおりしろく志侍
く資ある侍るあらく資見えくおりしろくく
物の下にあるもしゆく、あるをりさとおりし法く
思ひに何に目のあるか所に何か法けされ
のある所に目を付侍ころによく行くかさるく見ゑ
ゑしく見ん人はさきに仕く立ころも初心も
りのく花瓶毎に法しみて立なり花乃
ゑきと侍らに草の枝さる侍らにとい人とも
なきかにしく立事あるくらになきは侍らん心に
侍んに千金莫傳地の上には直く岩の上にある
曲なり慈悲のゑきと智恵の枝で背口傳あるべし
と身と云なるを何にか枝あるべし左乃枝より
智恵の枝背時る右の穿枝は慈悲の枝あるべし
又右の枝に智恵ある時は左の枝に慈悲あるべき
ならり閑枝るこの為慈又かくゆる枝をこの為智
是枝は此の為心得也究竪く




河合納涼
新古今
鴨社の歌合
とて人々よみ
侍りける月を
石川や
せみの小川の
清けれハ
月もなかれを
たつねてそすむ
鴨長明
音迄も
涼しくなりぬ
御秡川
蘿斎
文鳴

糺納涼はみな月十九日より晦日に至るまで下鴨社頭御手洗川のほとり神の杜の木陰に茶店を設て遊宴して炎暑を避る又雲井旅社の清泉水には耳瓜心太を冷し御手洗団子は竹串に刺て売る上賀茂より申楽ありて林間に笛鼓の音さえて涼し夏の火と秋の金は火尅金なりて相生せざる故に厄気を和攤の神事これを夏越の祓として下鴨は御祖神社上賀茂を別雷神社として延喜式に名神大月次相嘗新嘗 延暦四年十一月詔有て愛宕郡なる封十戸を充らる続日本紀 又弘仁十年二月には中祀に准せらる日本後紀 承和十一年の冬には社辺の河水が汚穢を事を禁し或は社域の四至が定る事倶に太政官符にみへたり仁寿二年七月には祈雨の奉幣ある翌日甘澍を得るの文徳実録に署し天慶五年四月には行幸あり又愛宕郡の中賀茂小野錦部大野の四郷を神田とし給ふ事野府記及び太政官符に出たり

貝原京城勝覧曰

下鴨乃社南にあるは御祖の社なり又河合の社と云 かも川高野川此下にて一ツに落あへ故に河合と名づく河合が前にてよりかの社は北にありて左向へてまつる又は東西に二をちあり

御手洗社の東南にみたらし川あり清泉水また出る夏も甚ひやゝかなり糺の杜あり此社頭を佳境とし林泉の藪も亦きよし遊人こゝに

四月中の午此日神輿日枝山の麓高野村の御蔭山に行給ふ祭あり伶人も多く従ひ彼處にしろしめく音楽を奏し乃中にくも音楽あり其日御蔭祭あり此日御社の盃し給ふ前日下鴨の神ちじめく来現の處なり此日御社勅使なし前二日と為づく中の酉の日また下鴨の御社に勅使立給ひ官司も多く従ふ伶人多くきらう神饌奉りて音楽奏次舞楽もあり東遊あり葵桂とりて貴賤あまた見る事夥し事終て其日勅使下鴨より上賀茂へ行ゆき官司伶人も供奉従奉り

○上賀茂神社当国の一ノ宮として平安城乃いまだ立させたまひより前し御社なり大社にして其地蔵閑後に山茂く川ありて陽にむかひ陰にそむけり其地の奥平安城の上流にあり山のかたちうるはしく川乃かぐれいさだよく御社の象をひとつ不にうつ城に神秀の氣のあつまる處ゆへをかれうる霊地なり王城の鎮守とうち守る事なれ皇朝類苑御神の霊異はもとの図すぐかえ給ひしみや此御神の事を詳に志給せり王城に来ぜし時人は心もあつく祈願をなさば先ツ此下上の御社に参詣なし給ふ人は心身いさだよく潔斎してかゝる神事をぐし志うらにはみづから神祠に入て祓でらんべかれば穢せんとするはたちまちにうやまひて神慮にかなはぬちはく罷りて

○境内に御手洗川あり神山より流れ出て本社の御前にて

されたやかくを下流とある小川と云ふなりの社は西に流る
古哥によめる名所なりの社は小河の東にありて小
は岩本橋本の社あり糺の森は本社の東南にあり社の
西に京錦馬貴船より宵 ○四月中の酉は日の葵祭に
勅使先ツ下鴨の社に詣給ひて後上御社に参り官司
及び給人も多く礼式あり音楽社に舞曲を奏し
勅使以下従来の行粧古雅なる事類なし
下鴨もおなじ石清水の祭を南祭として北祭を
北祭とも云是古今天下の大祭也賀茂下上の今日は祭
及ひ石清水の放生会の勅使もち古実を行ひ中絶久しく
継されし近年まで行はれたらしく行はせ給ふにいたる
人も都にあるをかならず見物して祭を
つくづくいつまでもかはらぬ殊勝の事なりとて諸人
たもいふなし只の事なるべし ○上賀茂の山に生れ
給ふ時より神山の西北にあり 賀茂明神初て
出現し給ふ所なり今日は閏白殿下参詣し給ふ社人
氏人参る ○五月朔日より神事あり 競馬の足
そろへの式あり 五月五日に競馬あり諸人群集
す由事多しと云

文本
行園やみたらし原は葵くをりかさしてはなかさん　平親季

御集
賀茂山のふもとの芝は春風にみどりし川の氷とくらし　後鳥羽院

山家
月のすむみおやの河原に霜さえてちどりとわたる川瀬の　西行法師

鴨祠ノ春望　鴨祠ハ崇神天皇ノ祠也故ニ有皇祖ノ名

緑鴨江開ク鳳闕ノ東一林ノ春色鬱蔥蔥
何ゾ年カ銷歇ス舊齋院終ニ古依然タリ御祖宮
大岳北ニ懸テ千峰秀テ清流南ニ合ツ二川通ス
興来テ有レ意ニ隣ニ村酒ヲ類ヒ是レ杖頭銭赤シ夕空　龍公美

水くし月長明と痩さらしむ　如泉

夕立や雙六の塞鴨乃川　木導

かそうかく糸の小川や姉か夢　文素

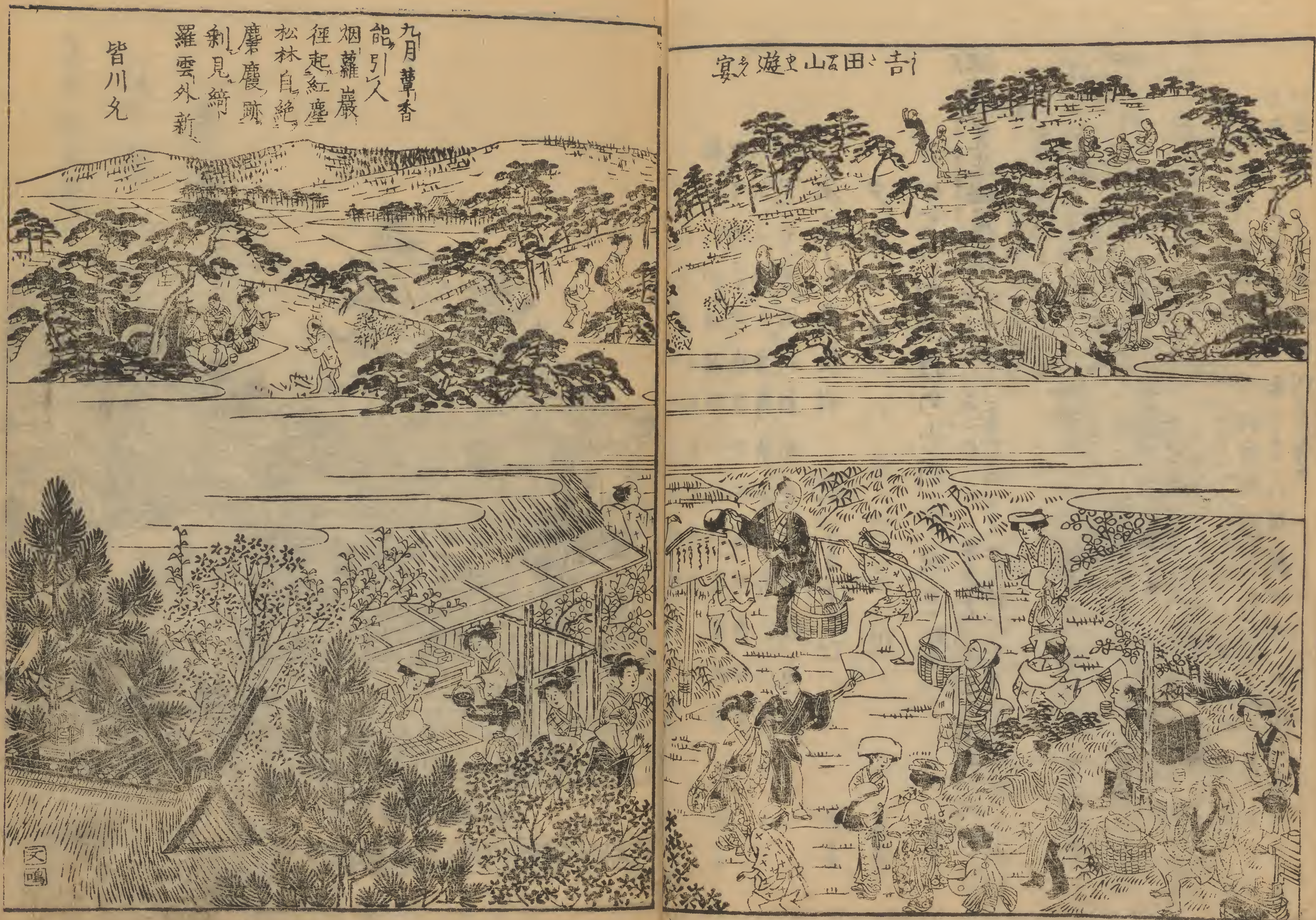
惺窩先生幽居蹟　市原村の西にあり姓は藤原名は肅字は斂夫北肉山人と
称す又黄門定家卿十二世の孫元和五年辛未下冷泉
家と称れ又号す林學士の

祠堂二ノ瀬村にあり

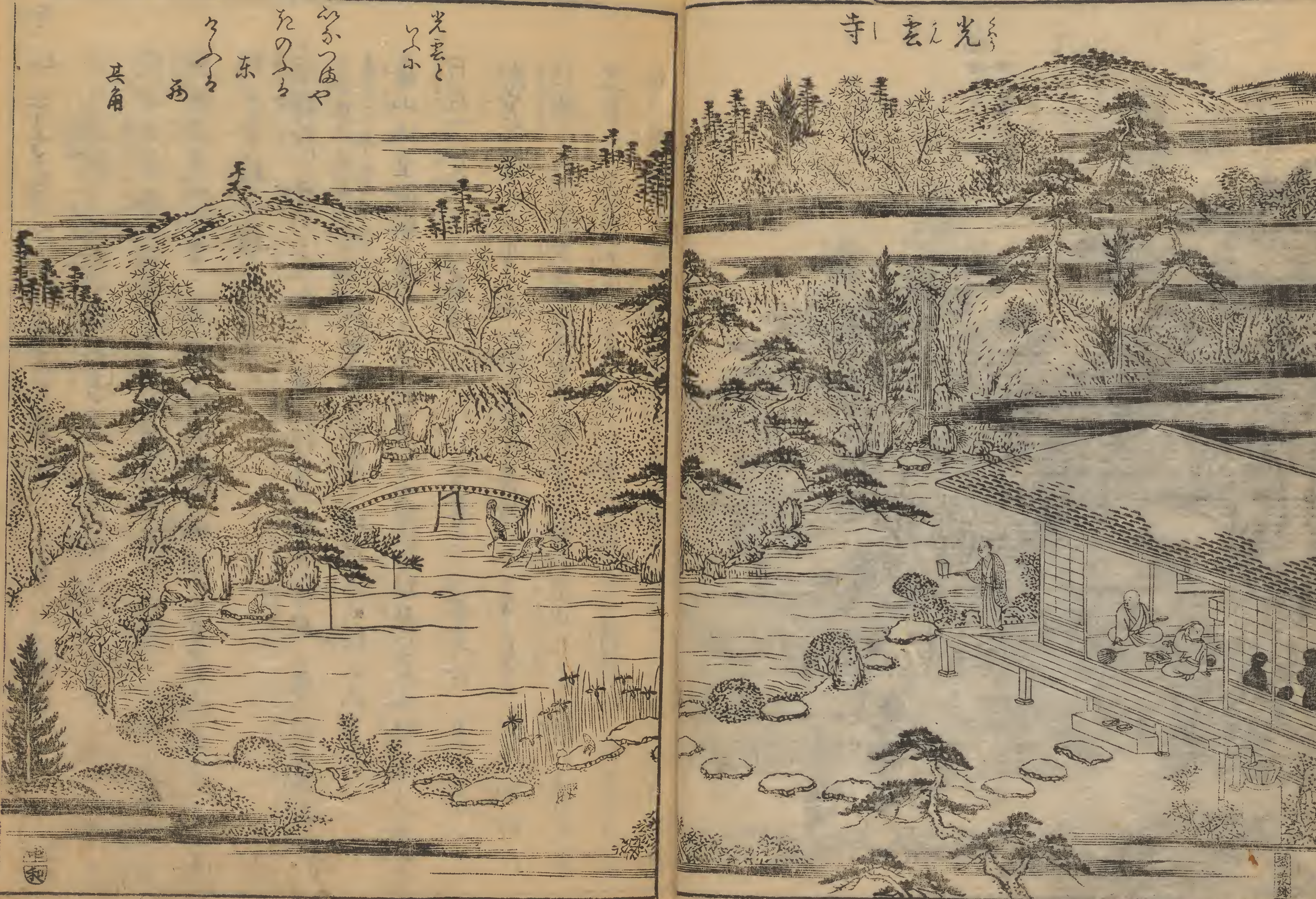
氷室古跡　四箇所にあり一は氷室村一は栗栖野一は高野村一は松ヶ崎
延喜式云小野栖原市原氷室村と云

中山忠親公別荘蹟　直如堂の西にあり藤戒記に見ゆ又中山関白ノ第は百練抄
に出る又源頼政朝臣の古跡及び中山堂山槐記に見ゆ

卜部家齋場所　吉田山にあり原洛陽近衛室町の私第にありし事は長興
名神廟燬みな公卿の尊まる所く見ゆ文明十六年兼倶卿よりて移し　其法殿
しく禁中に遷し尊く後帰る所く天文十七年二月神殿に奉
日録に見ゆ天正年中勅によりて八神殿と兵乱を避んが為に兼右卿
八月勅しく神祇官代となる　遷は慶長十四年


九月蕈香能引人
烟蘿巖徑起紅塵
松林自絶麋麑跡
剝見締羅雲外新
皆川允
文鳴
吉田山遊宴

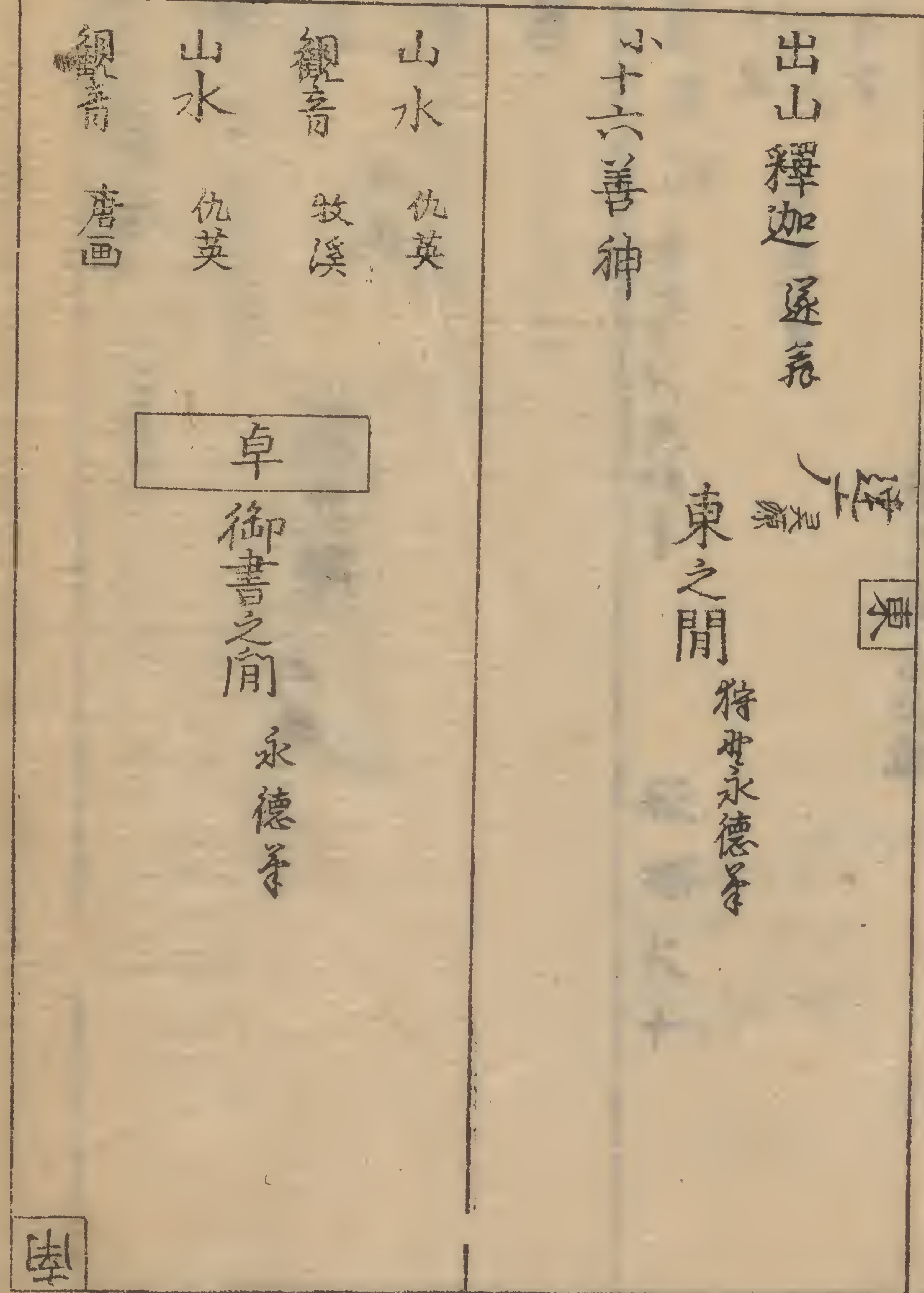

黒谷西翁院
反古庵（ほうごあん）
藤村庸軒（ようけん）作
遁世にかまへなるらん
草の戸の
よのほくをとは
その名にも
しるく
八幡 美濟


光雲寺
光雲といふ
ひかつ成や
花のふる
東
くつる
為
其角

南禅寺方丈の林泉ハ奇石巨巌砌ニて雲夢七澤を開くの仙境也
方丈東間ニ鳴瀧の圖あるハ古法眼元信の筆中間廿四孝ハ
狩野永徳西間同筆ニして花鳥の画也西表一之間古法眼筆
同其次の間次ニ三間共ニ竹ニ虎の画世ニ志られ水呑虎といふ
何れも狩野探幽の筆也

○南禅院ハ南の方ニあり　亀山法皇の離宮の中央　亀山法皇宸影 表 讃云
先切徳主亀山太上覚皇崩殂 嘉元三年九月十五日　此堂内三間倶ニ狩野常信の画なり
亀山法皇御廟ハ南の上方式所ニあり当院の林泉ハ東南鮮ニして實ニ
日月を扶助するの霊境也抑当山ハ寺記ニ云弘安年中　亀山上皇志て
離宮を営て仙居し給ふ厥后宮殿喜捨して寺となし大明国師を
住職し給ふ又至徳三年七月勅して禅刹五山之上と称し建武元年
十一月より当ハ園太暦ニ見へたり　○金地院ハ五山僧録司と称し当院の
林泉佳境ニして名巌多く心といふ文字ニ双並ぶして後ニ鎮守昭堂
あり南方ニ　御宮あり当方丈ハ南面にして中之間仙人盡左右ともに
花鳥みな狩野尚信の筆也其外当院玲瓏として当山の佳境なり

南禅寺方丈虫干之体



大十六善神

琴

碁

書　孫通

畫

西之間　永德

羅漢十六幅

康富記　勧修寺經廣卿筆

文殊　釋迦　普賢　思恭筆

七朝國師香陽最嶽和尚

鶴之間　古法眼

蘆葉達磨　南院國師自画讃

十六羅漢

眠鷗之画　萬國禎

後之間　狩野主馬

百丈禪師頂相
臨濟禪師頂相
普明國師頂相
夢窓國師協
寒山拾得
東陽頂相
本光國師頂相
信長
布袋
梅
竹
鶴
日
羅漢（思遠居士名、何画讃）
釈迦　画　思恭

亀山法皇宸像

亀山法皇宸翰和哥

鳴滝間　古法眼

後醍醐天皇宸翰

竜渕室之額　後陽成院宸翰

應菴像 桃洞寮 什物

此殿 後陽成院之清涼殿之 柳之間 古法眼

古法眼 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

竹 竹

鵲之圖

金鶏

鵰鷲 林良

山水 舟行 水鳥 起龍 閑人 松

蘆雁 林良

蘆雁

文進 三友堂圖

可翁 荷鷺

文殊 之像

可翁 荷鷺

達磨 探幽

蝦蟆 鉄拐

虎之間 探幽

山水 子果

大明國師頂相 亀山法皇勅賛

後柏原院宸翰 虎之貳之間 探幽

山水 子果

示以後墨蹟 梵仙

文殊 釋迦 兆殿司 普賢

開山國師香陽寧一山

虎之三之間 探幽

虎

南浦國師頂相 探幽

大明國師頂相 探幽

亀山法皇宸像 探幽

龍 探幽

文殊 清拙賛

華山圖 馬公顯

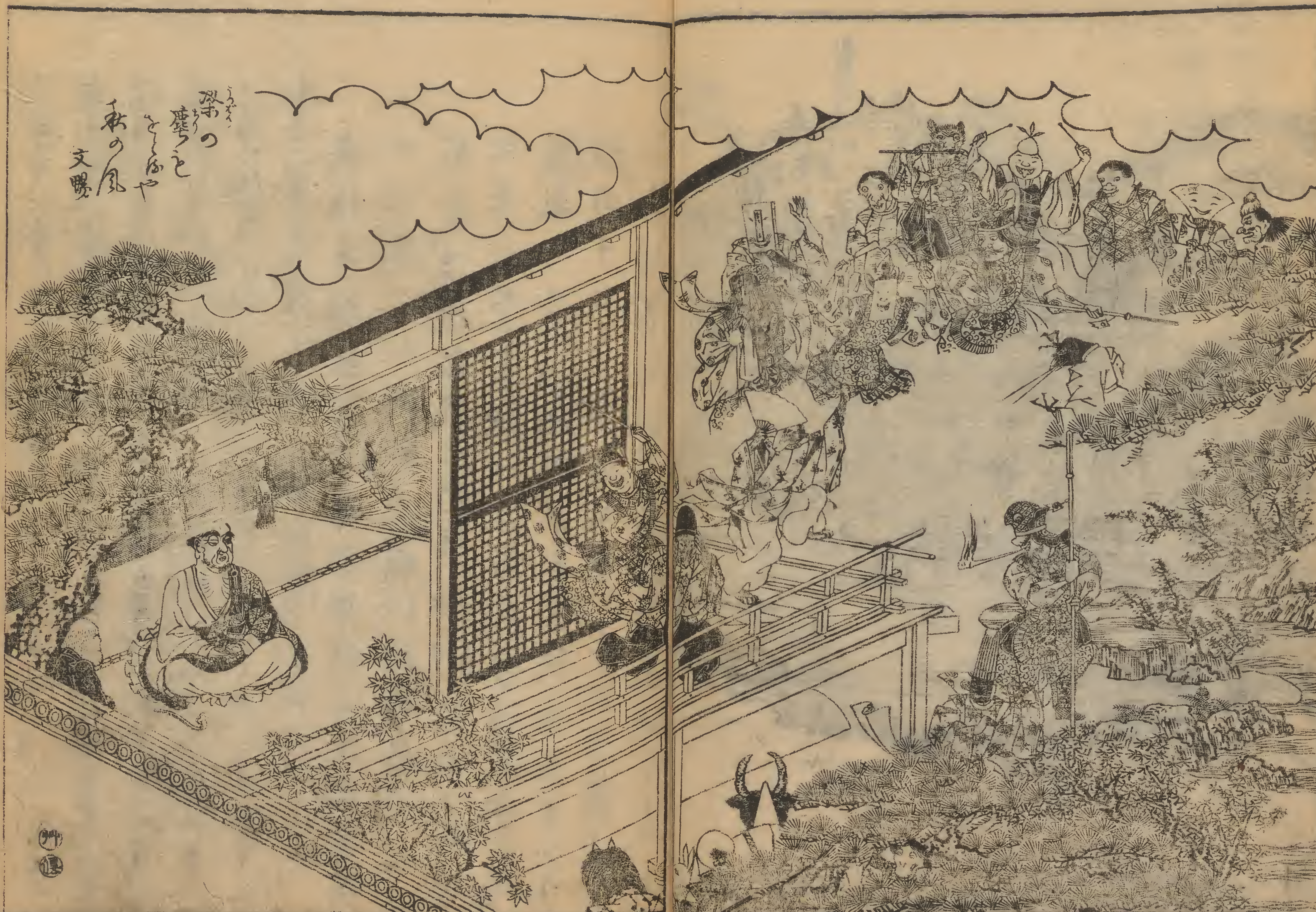
開山頂相 平田賛

華山圖

高歩達戸


南禅寺
方丈


南禅院
亀山法皇古墟
龜山法皇陵


楽の塵をさらはや
秋の風
文暁

南禪寺什寶の中に菅神の矮銘 三幅 烏樞沙摩明王 一幅 永仁七年亀山上皇の勅書正安以降綸旨國宣院宣建武中宮將足利家古證文及び將軍家の施捨文等あり其外塔頭古書軸を藏むる事數百通におよびかれぞ筆するに際限なし○塔頭聴松院の林泉風色幽雅にして庭に碣硯の水鉢あり又菅神夢想の名松あり老木の大樹にしてありしが近年裏枯して朽たり故に植継あり其銘曰

南禪寺聴松院者恵鑑禪師所住也曾傳一夜夢 北野神君賜以殊所珍賞松一株覺後感銘無已乃早洒掃庭内卜地待之果自菅家贈一盆松與夢所見合云此蓋哉 是褁祖也然不知其為誰向者予有故遊于此寺賞觀有年矣青蒼欝茂株根數圍實是數百年物也寛政辛亥 今住持正巌禪師乞予詩之因賦一律應其需

青松百尺接天開曾入高僧夢裏来林下誰知奉神託庭前偏好挺凡材計年風外潮音起仰徳雲間龍影回元自奇句在人口千秋併賞賦中梅

特進 菅原胤長

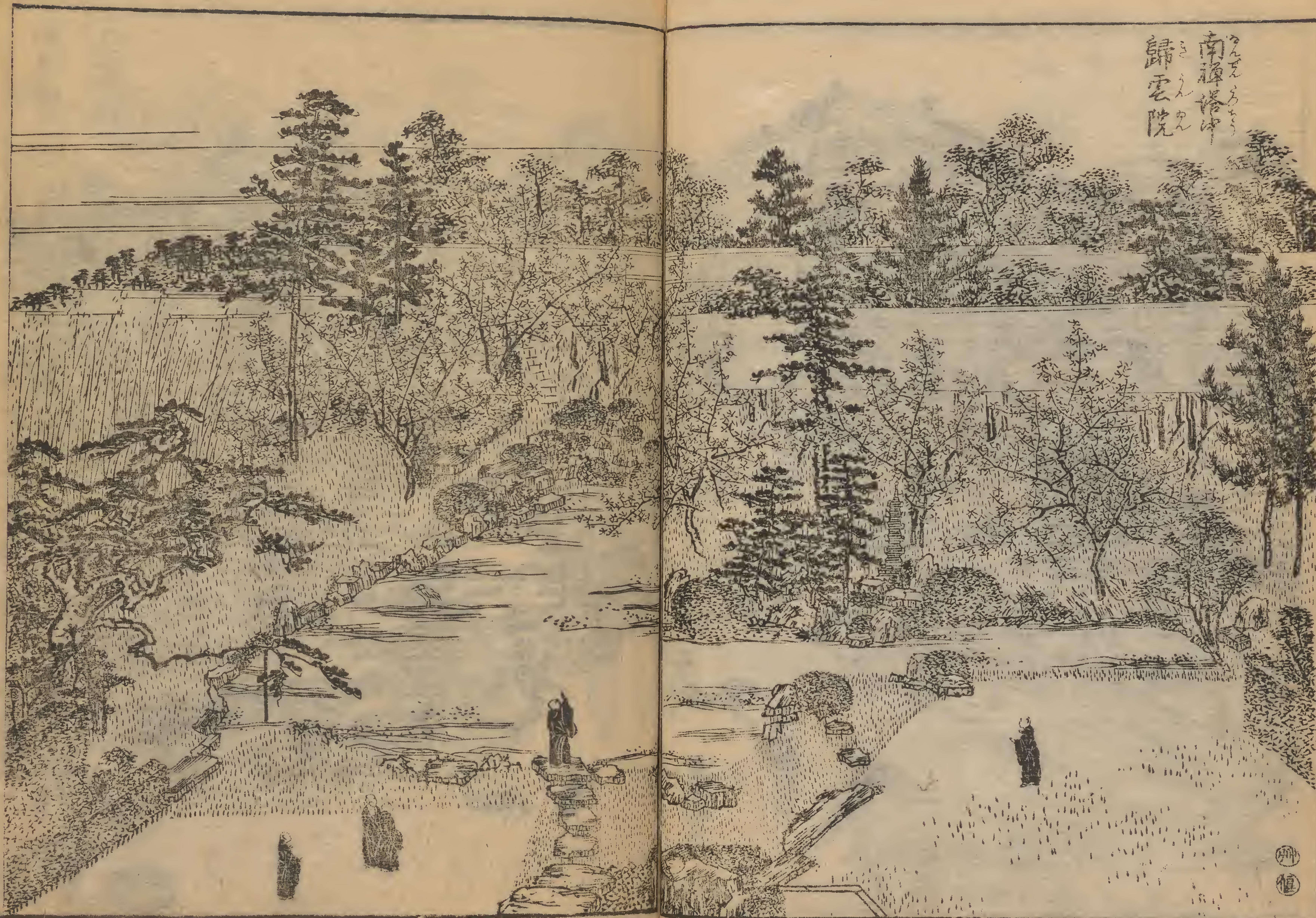
**藤在衡公別業蹟** 神楽岡の北にあり拾芥抄に見えたり藤山蔭卿の宅址も著聞集に記して委し 安和二年三月十三日尚歯会を設侍る菅三品の序文は本朝文粋に著す 惟宗孝言の詩に曰 勝地佳名何所蔵 栗田別業在城東 無題詩出

**菩提樹院址** 神楽岡の東にあり地名を櫻本といふ百錬抄に云長暦元年六月二日上東門院菩提樹院を落慶し給ふ

玉葉 〻ふへ〻く櫻本こそゆかしけれ花のかゞみに花や残ると 周防内侍

**寶莊嚴院址** 聖護院村にあり長承元年十月鳥羽上皇勅して建立し給ふ拾芥抄に見ゆ嘉安二年三月十九日宝莊嚴院にて和歌尚歯會あり藤原敦頼をもつて上首とし藤原清輔をもつて盟主とす百錬抄にもみえたり


南禅塔中
聴松院
林泉 相阿弥作
菅神
霊夢松
菅公霊夢松
勅使石



南禪塔中 歸雲院


南禅塔中
牧護庵（ぼくごあん）

Lantern path




南禅
金地院
小堀遠州作

真一




白河離宮　岡崎村と北白河の間にあり法勝寺の地これ也原ハ忠仁公の別業にして子孫ニ傳ふ累代皇太后多くこゝに住し給ひ御院と称す萬寿年中藤原師實公新たにこゝに遷替し白河の帝ニ献ず帝法勝寺を建て離宮とし給ふ康平三年三月二十五日帝白河院ニ行幸ある事ハ康平記ニ見へたり又本朝文粋ニ云

夫白河院、昔是大相國照宣公之幽居、今則博陸候右丞相之別業也云云

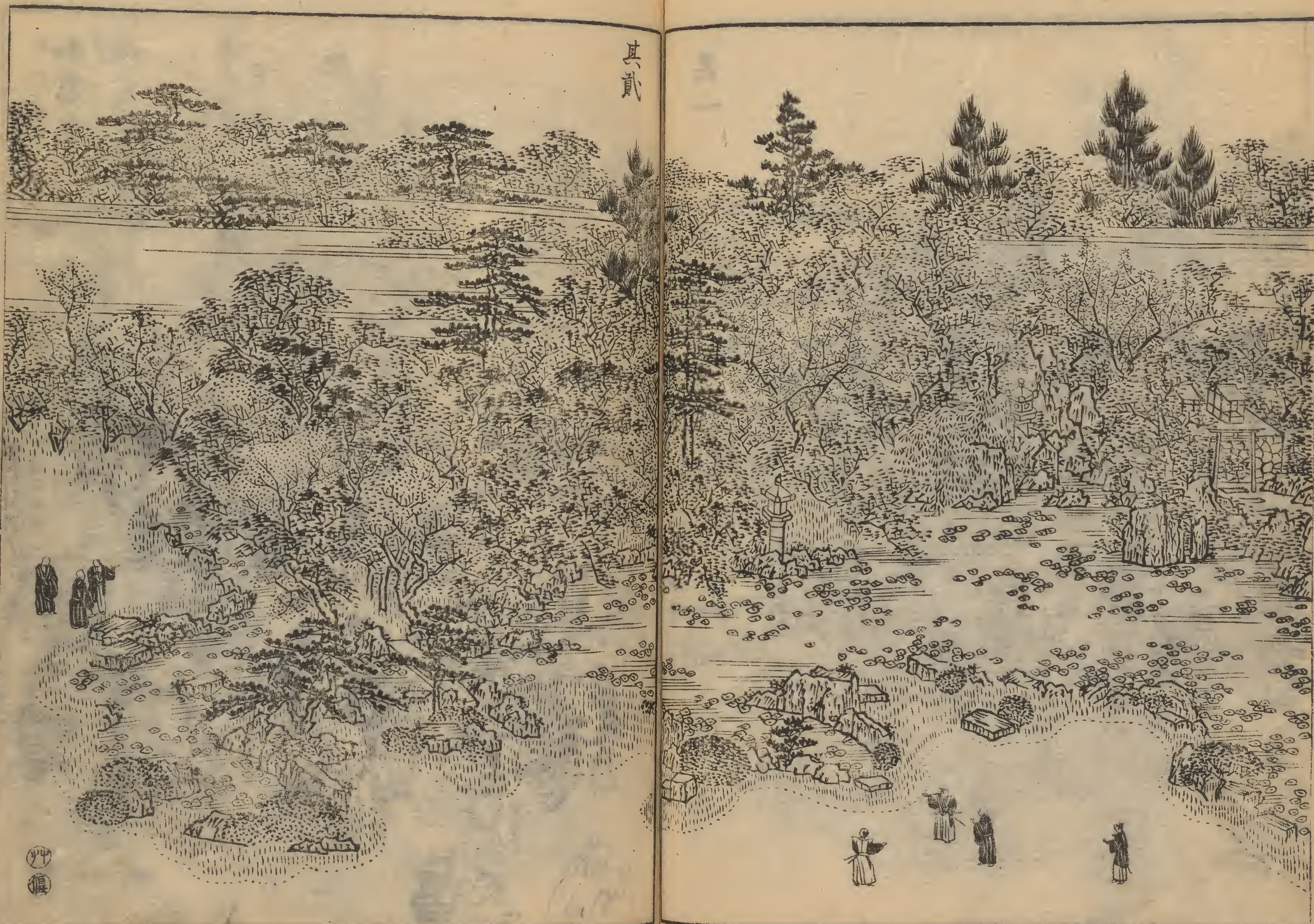
風雅
花ゆへにみゆきふりにし渡りとて名のみや出る白川の水　菅原祐親

新拾遺
幾とせもめづらしきかな白河の花とぞそれや春の御幸ハ　法性寺入道前太政大臣

地名の字ニ白河の北殿南殿築山下ノ御所等あり元永年中白河上皇の離宮とし保元元年崇徳上皇こゝに遷幸し皇居としたまふ闘擾乃禍ありて決戦利あらずして上皇讃州に遷幸有て殿舎悉く崩れり寿永三年四月勅して原廟とせしが創に是ハ粟田宮と号し祭儀厳重なり吉記に見えたり建武元年七月兵燹に罹る文和三年二月重ねて建営ある大中臣の明記にあり是より先嘉禎三年四月粟田宮ハ東の方に遷して洪水の害あるをおそれてなり新殿ハ小殿の東にあり泉殿ハ阿弥陀堂の故墟にあり地名今に当れり園太暦云嘉元五年五月二日白河阿弥陀堂の泉殿を以て安嘉門院の御所とせられし白河押小路殿近衛河原殿偏ニ河東にあり安嘉門院。北白河殿。野河の御所。白河池殿。等も的所いまだ詳ならず岡崎殿ハ岡崎村の中の地名なり御所内といふ嘉元年中上皇営中ふかく離宮としてあり解に百練抄にみえたり


名物
南禅寺前
湯豆腐店
嘯山
丹後屋


知恩教院
方丈林泉
其一
護法石


其貳

Stand of flagstaff
Stair



陽成院陵 天暦三年九月太上天皇崩じ給ふ神楽岡の東に葬し奉る
扶桑略記に見へたり今詳ならず

冷泉院陵 神楽岡のあたりにあり今鮮ならず寛弘八年十月櫻本の
西ニ於て葬し奉る帝王編年集成に見えたり

後一條院陵 長元九年五月十九日神楽岡の東南に葬し奉る真如堂の後
菩提樹院を建給ふ扶桑略記に著せり

粟田院 粟田口の北にあり字を圓覺寺といふ清和天皇の離宮なり三代實
録ニ云元慶二年五月四日太上天皇清和院より粟田院ニ
遷幸しめふ又云元慶五年三月十二日勅して愛宕郡粟田院
ハ原是太政大臣藤原朝臣の山荘なり 太上天皇清閑寺ニ
遷れ給ひ暫く仙蹕を駐られ遂ニ此地ニ於て落飾し給ひ
道場となしく額を圓覺といふ又云元慶四年十二月
太上天皇圓覺寺におゐく崩じ給ふ 延喜式云圓覺寺料
一千束又此邊ニ源為義の山荘の址あり

無題詩云
今ハ來圓覺勝形境　念佛遙期九品蓮　　菅原在良

青蓮院 粟田口にありむかし前大僧正慈圓及び慈道法親王当院
ニ住職し給ふ和歌續後撰集及び玉葉集に見へたり
境内に尊勝院あり
應仁記に見ゆ

知恩教院 大谷寺と號す此地むかし正久寺常在光院白毫
寺太子堂及び釋親鸞聖人の墓ありあるひは
廢しあるひは他境へ遷る

志ら雲とみへつも人のむれなりけりあへて花茶のちりてさゝれ山　　狼狽窟

かたをかや京を走り出る御忌詣　　蕪村

御忌の鐘ひゞくや谷の氷まで　　仝

御忌のかね淀も鞍馬も平等に　　八十叟 嘯山

松の端耳ふさぐへし御忌の鐘　　其蔬

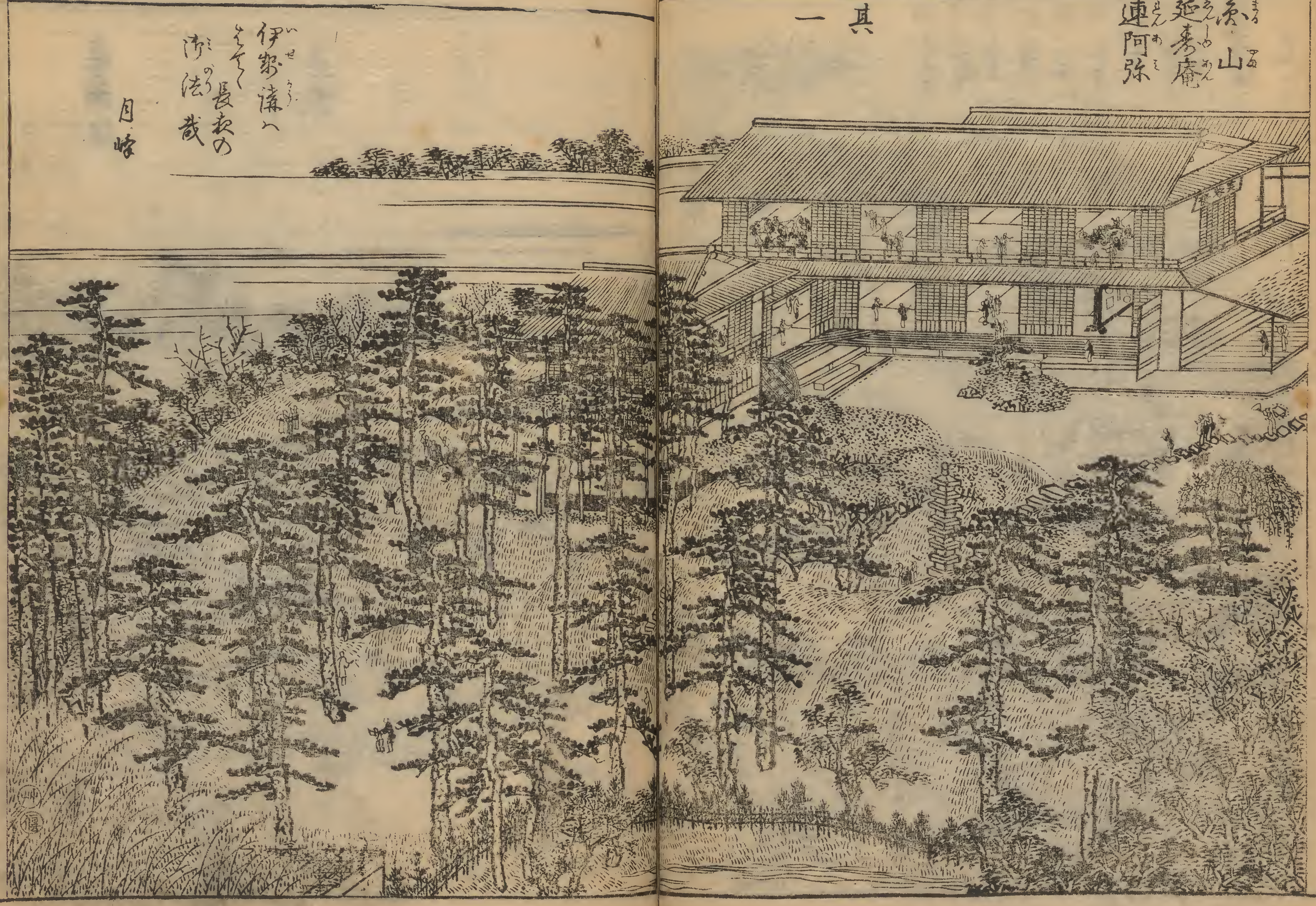
知恩院にありて
町中に櫻ちり入る知恩院　　蘭更

圓山 安養寺といふ吉水大織法院の故遺之慈鎮和尚棲申ハ峯石蓮社
ふもとにあり坊舎六字山崖に連續く亭閣林泉玲瓏やうしく
洛東の佳境也 長寿庵左阿弥 勝興庵正阿弥 花洛庵源阿弥
又端寮といふ 多福庵也阿弥 延寿庵連阿弥 多藏庵春
阿弥 此中左阿弥ハ織田入道雲生寺 道八の塔ありされる
信長の舎弟有楽の子なりむかし顔輝の筆此達磨の像あり
道八賛しく云
ふそくふれやつまらかへちみぬるもしまあ乎この人達磨今のみハ
わろ和とかくわかぐらも世農らきをしたかほさをも浦ふしと申まと
磨も人ハモふ和古坊主ヲ差人トラヘテ
成我和ト世説可殘垂カト
虚空元年日

多藏庵の庭遺へ桐阿弥の作多福庵の書院の画ハ啓漢の筆又
境地に吉水の名泉あり

今朝出し日ハ此川帰路むかし山　　羅人


圓山
多藏庵
重阿弥
初ハ眼阿弥とよふ
㊀玄居亭
㊁四大塔
㊂宇賀祠
㊃春曙池
㊄七星橋
㊅彩霓橋
㊆浪影橋
㊇春眠亭
㊈天柱峯
㊉桃源窟


圓山
延寿庵
連阿弥
其一
伊勢講へ

將軍冢 華頂山の上方にあり親長卿記云 明應二年十一月五日鳴動す

和漢雜詩曰　周一居士

洛水城東第五橋　秋風上國思迢迢
將軍塚靜家無難　富士峯深雪未消
鯨海浮杯朝對日　龍宮洗鉢夜聽潮
阿師到日若相想　莫惜音書萬里遙

上東門院塔 知恩教院正堂の西にあり藤原氏彰子一條院乃皇后道長公の女く扶桑畧記曰承保元年十月三日崩しまゝ大谷に葬侍

家集云 皇太后宮せさせ給ひて大谷に送りまいらせしかは

あはれ君雲のよそみも大谷の煙となるらんかけとやハ見し　相模

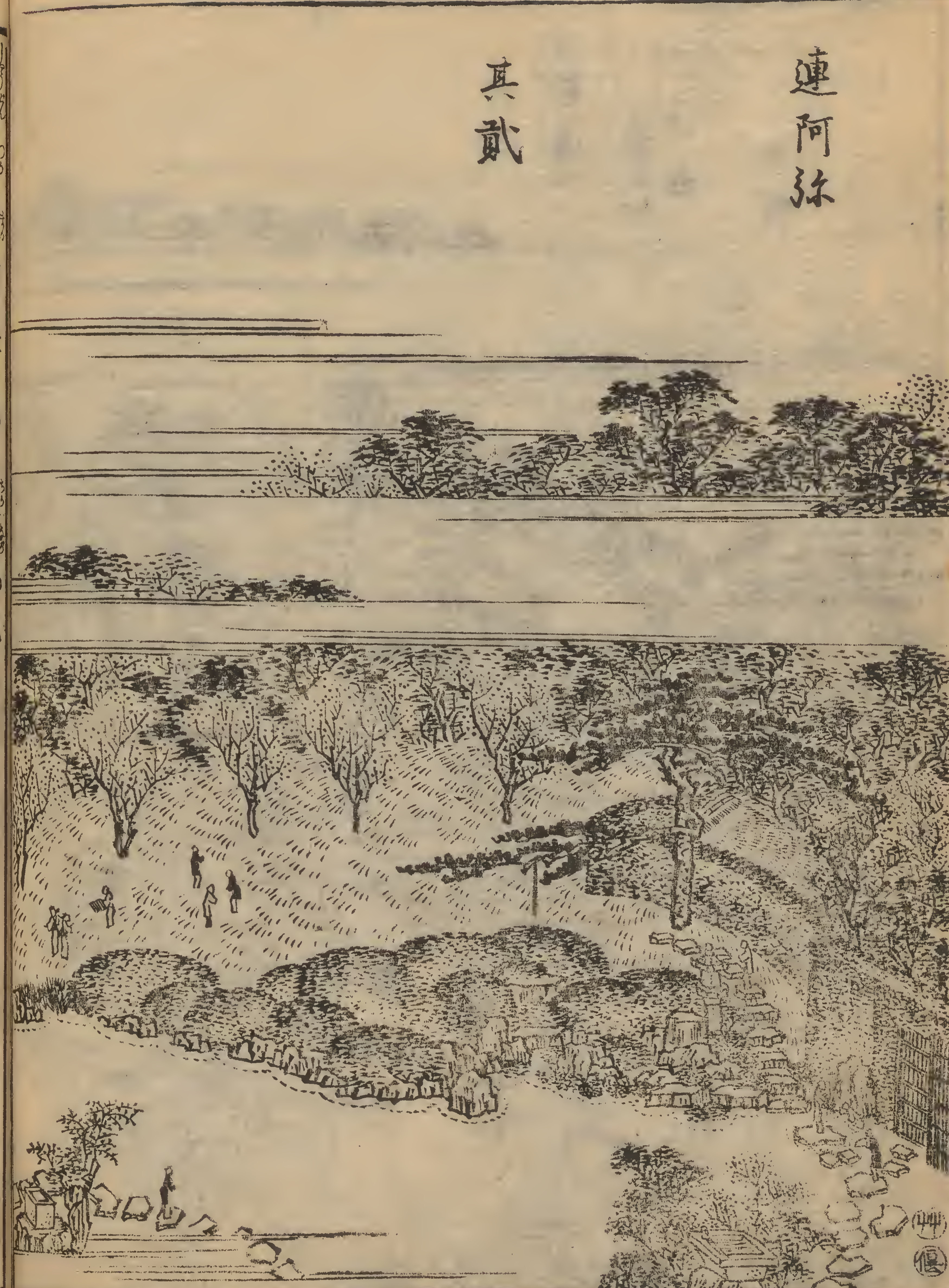
皇太后妍子塚 萬寿四年九月祇園の東大谷に葬りまつる栄花物語に見ゆ藤原氏三條院の皇后道長公の女なり今これを世人祇園女御の旧蹟と称し児女子此塚に詣し羅綴を祈るも可笑らんや

長樂寺 祇園の東にあり寛平年中建立拾芥抄に見ゆむかし諸儒多くきたりて遊宴しく詩を賦す無題詩に著し又大江嘉言の和哥あり後拾遺集に出る

初冬於長樂寺同賦落葉山中路　高岳相如

本朝文粋

夫長樂寺者形勝之其一也山頭東嶮望鷲峯於不退地之前野面西平顧鹿苑於



無漏界之右。干以俗機可斷。于以業塵可消。故吾黨占斗藪。兮攀登。攀合掌兮禮拜而已矣。于時樹間葉落。山中路幽。晩霞影輕。漫埋出峡之猿叫。暁雨聲冷。暗洗在林之鹿鳴。度澗口以繽紛。拂岩腹以蕭颯。至彼錦窠脆而辭蜀機。卅九碎而謝仙竈。樵蕘往反。杖穿朱買臣之衣。隠逸優遊。屐蹈葛稚仙之藥。遂使結烟之苔鬢半變其青。噴雪之泉脉漸欠其白者也。既而世外地上。天中樹前。錫振九條寒嵐傳而響遠。鐘撞三下夜霜和而韻高。如予者蘖生難秀。雖守槐林之株。花報猶芳。始到蓮宮之砌。請任禪定將離愚癡。云爾

**蔡華園院** 双林寺の内東にあり此るハ拾芥抄に云左大史尾張定鑒の造建なりといふ又僧房六區あり寺ハ永正十年の縁起文永和年中の古勝あり又僧西行菴の址あり某菴集たえゆる又平康頼入道の山荘の舊蹟あり平家談及び寶物集に記せり頓阿法師の墓あり崑玉集に出らる近年双林寺頓阿の古蹟蔡華園院と号し遷しく額をおさ名跡とせ故に遠上家のわ舟あり是れ之う先途徳年中圓阿上人名地の荒廢を嘆く再興に及ぶ




端之寮
庭阿弥姐
其貳


東山席上題同應衆需
画
山秀川迴抱帝州
欄前萬景在毫頭
冊青天下無雙手
佳麗東山第一樓
右
権書端寮地永田観鵞曾大書此五字扁于其樓
六如庵慈周

Repast

安福菴
やせ弥の
若月あまく
肥ふとり
よき妓侭の
姿ふ挙
しと見えて
柱おと
よる

凪ふ
おゑ
あふて
庵の
柳榴
ヤア
勇の
貌かえ
福の
根

うまく
扇ふ
煽る
胡蝶
かな

呂蛉





圓山
多福庵
也阿弥
林泉
其一
春日同詠寄鶴祝言
正二位資枝卿



多福菴 其貳

有聲作

題芳水多福菴

門前芳水澹
巖崖流繞閑
庭苔自埋宜
矣菴題多福
字烟霞雪月
四時佳

龍公美


丸山
長寿院
左阿弥
林泉ハ織田乃八作りしと
いへり又乃八の古墳あり
寿雲楼
梅のちれ
あてつゝ誉の
野さくら
定雅
中和


圓山勝興庵
正阿弥
書會

Gate
Same?

Piazza floor, railing
Curtain inside gable

圓山（まるやま）正阿弥（しやうあみ）其二



祇園社　天永二年官符を賜て愛宕郡八坂郷観慶寺感神院を以て延暦寺の別院とする事は今昔物語に見えたり延久二年十二月焼亡（?）事は扶桑略記に志るす承安二年六月上皇神輿三基を進む百錬抄にあり正殿礼殿神楽所御厨所小祠四十薬師堂今為観慶寺と号す次元三大師堂多宝塔は近世烏有に罹る祠官の長は執行といふ一家にて建仁以後綸旨院宣并御教書及び将家の書翰数十章を蔵む僧坊九区祠職二十余家あり六月祇園会神輿の旅所四条京極にあり当年修補に建ていふ一は烏丸五条坊門大善院にあり今は大政所町とて

○祇園神輿洗　倭紀事云五月晦日生子の男女祇園社に詣して各形象を受て禍災を祓ひ是を茅抜と称す夜に入て神輿三基を斎殿に出し祭式を勤む所謂本社の中央は素戔烏尊なれば大政所と号す次西は稲田姫なれば少将井と号す東は竜王女なるを今御前と号す次大政所今御前の神輿は斎殿に出し少将井の神輿一基は祇園町地蔵堂のおやすく神人奉じ（?）出して濯く是を洗ふ故に名あり此日産子の人々一様の挑灯を竿頭に張て伊達あつ（?）浴衣を着て本社へ参る是を御迎挑灯といふ又祇園町の妓女伶妓婦の党風流に姿を優しく花の盃にも酔ふがごとく身をやつし繍（?）にて装ひあるは女も男の風俗に変て翁も若の形となり花の下陰雑子糸竹の音も紛く（?）社頭二軒茶屋の下祇園町の群集は稲麻のごとく天地の間もあらうかと又六月十八日も遠物（?）出して群集晦日に異ならず実にみなされ神徳の余光なりしと平天下の始ぞはじまり（?）ある画し
美しの宮人難波きて後ひ　藤原（?）

高台寺の林泉は豊太閤御霊屋の下段方丈の東にあり風光都雅にして洞庭と錦の傍あり旧此地は雲居寺岩栖院金仙寺等の古跡なり当山乃嶺を鷲尾といふ鷲尾中納言隆良卿の山荘の跡によりて号るなり慶長年中豊太閤の夫人高台院湖月尼公の営給ひ則ち此に葬らる石塔婆あり又其側に天哉翁長嘯墓を建る御霊屋は宝形造にして内外荘厳美を尽し長押の上に卅六歌仙を掲る和哥は八条智仁親王筆画は土佐光信なり

秀吉公影　政所尼公影　三江和尚像　木下二位法印像　常光院殿二位茂叔　浄英と号す
法印妻尼像　雲照院齢岳　永寿と号す　堀監物像　傑山道英居士　千手院（?）城門前（?）　されば当山は洛東の佳邑にして名区多し春は桜花幽艶として匂ひ濃く夏は庭中の池北面に燕子花咲乱れ又秋は萩の花錦を晒すがごとく霧深うしてあたかも鷲嶺の月皎々として繹之（?）は連峯小斎（?）繽紛と風に随ふて花紙飛し東坡が白鳳に騎かと疑ひ宋玉が幽蘭白雪の曲を作るの勝地なり




秋過高臺寺見芳宜花　龍公美

高臺人靜梵王家　烏雀群飛樹外霞
日暮放參鐘絶後　秋風摧紫鹿鳴花

九日環中禪師邀中和尚及余遊高臺寺上方余有故不得陪從後讀其唱和詩有感因賦呈二師　六如菴

（寛政己酉春罹災鞠爲荒場矣）

佳賓佳節興佳哉　詩爲兼秋更帯哀
百六數歸已嘆　火金銀寺化漢地灰
織亭避雨寒吹帽　菊水試茶香滿杯
正使空門心不着　堪看鹿跡上高臺

寛政己酉春高臺寺罹災鞠爲荒場矣環中禪師辛勤重構亡幾殆復舊觀功亦偉哉　六如菴

巨厦支頤辛有人　重榮花木挽回春
唯除林表孤峯色　二百年來事々新

高臺寺の花さかりに
迷ひてそ世におもしろき桜かな　定雅


高臺寺方丈林泉
其一

# 高臺寺小方丈




乙卯重九環中上人邀登高臺寺山閣設宴

蕉中禪師

白雲西望夕將沈
綺席留連興轉深
不擬登高能作賦
鮮言山水有清音

同賦

環中禪師

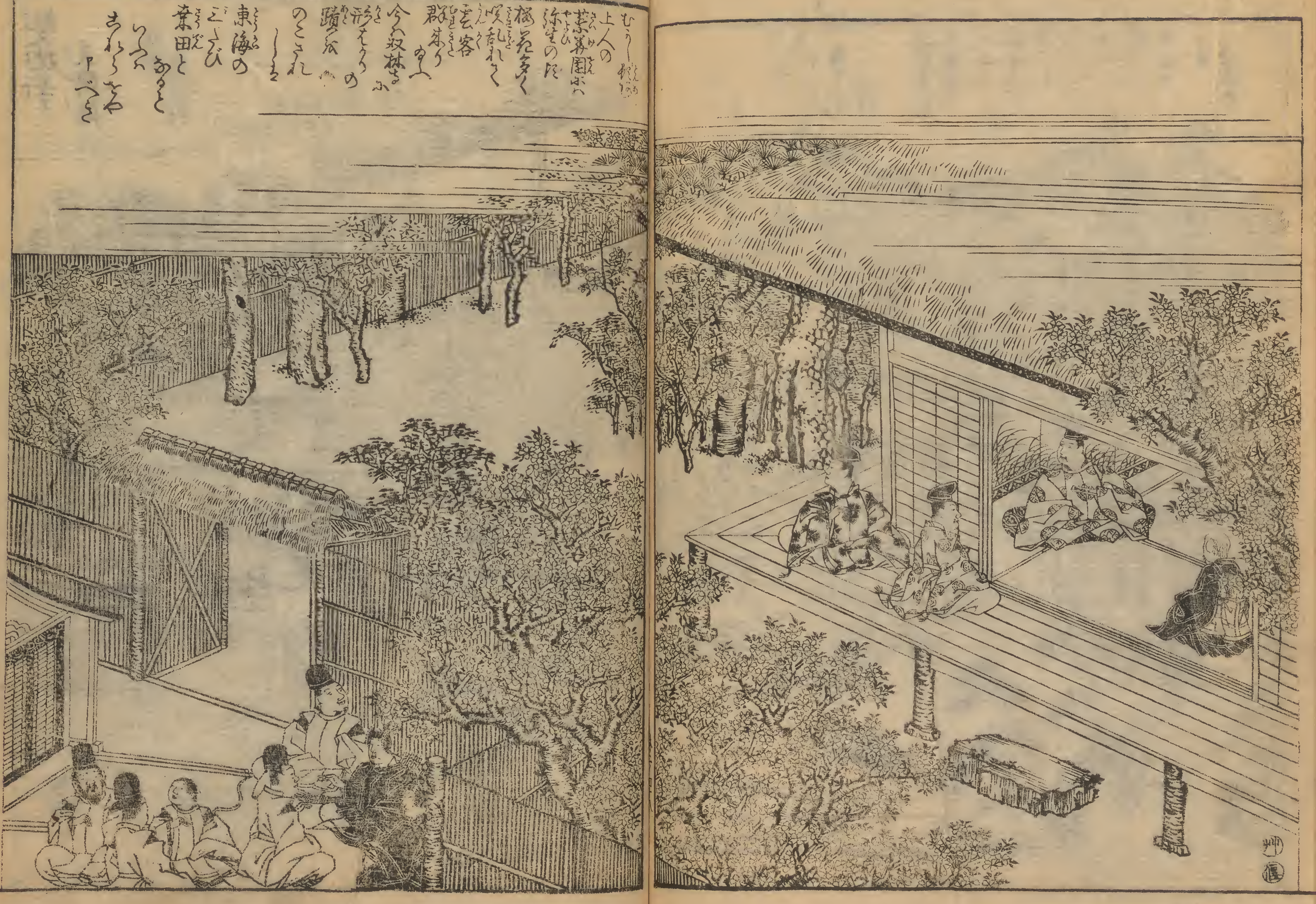
登高非傚俗
迎賞爲林泉
攀閣幽松際
憑欄飛鳥前
暮寒千嶂碧
雨氣萬家烟
適莫歸期晩
好教初月懸

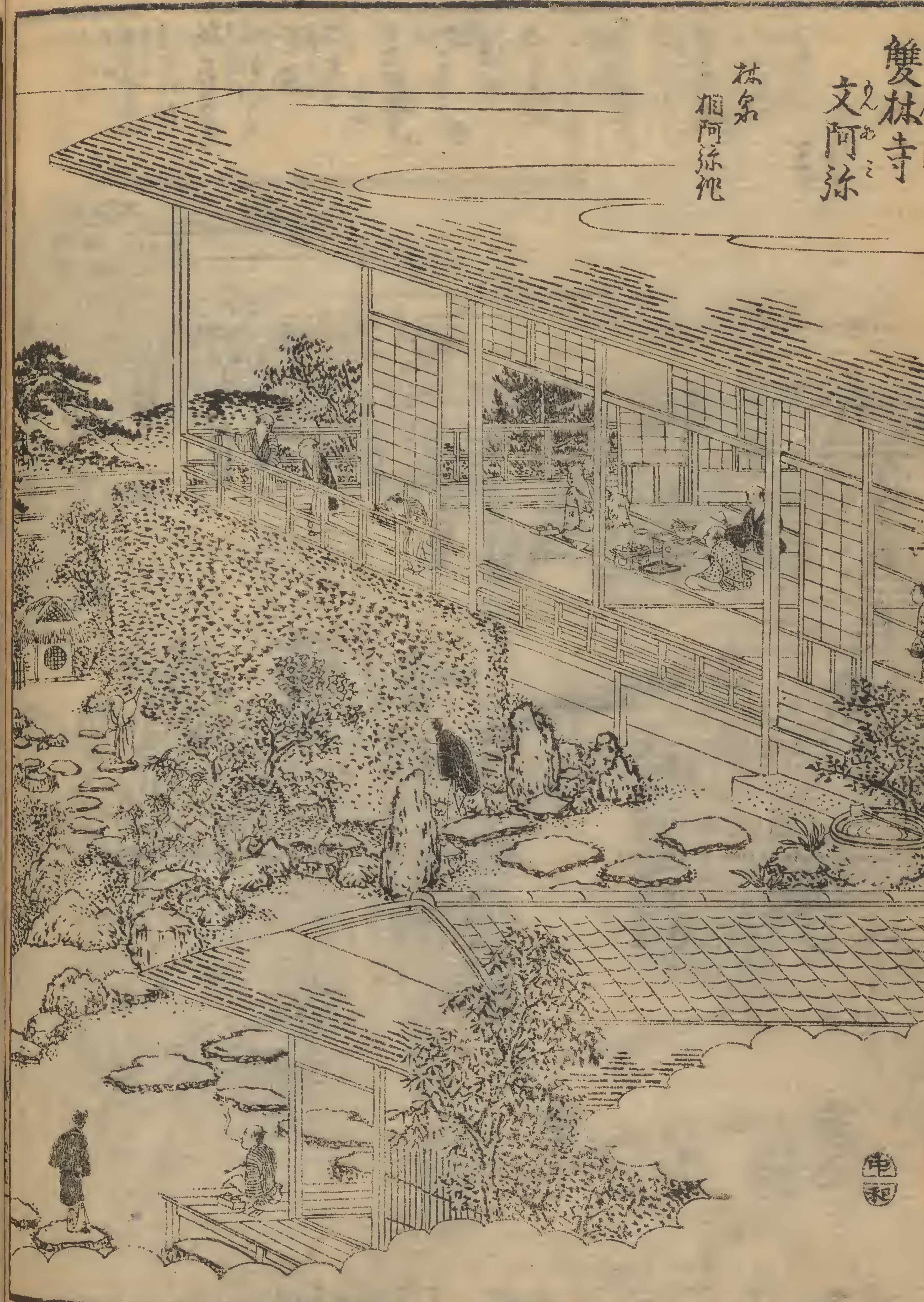




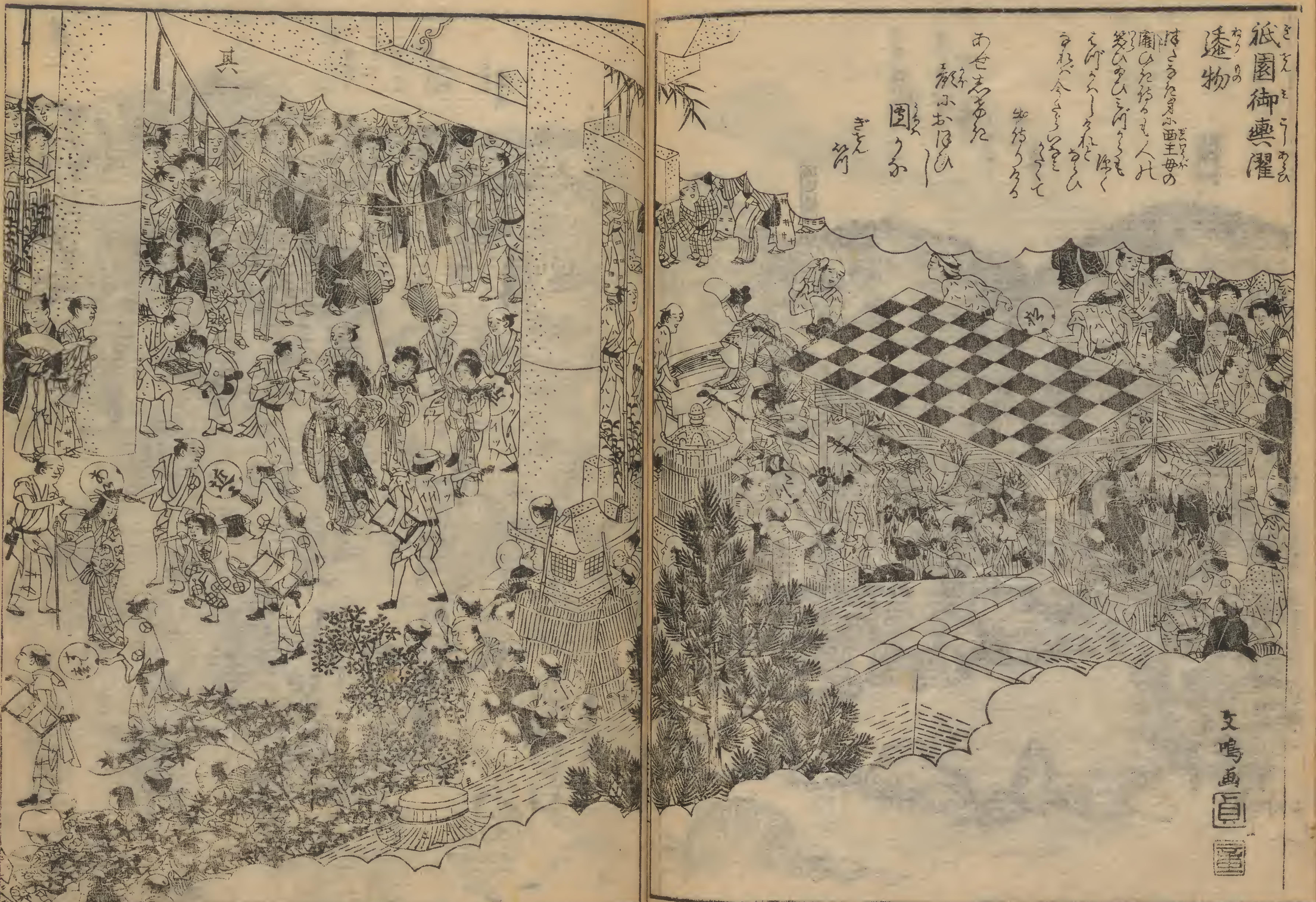
雙林寺
長喜庵
宿蓮華院主
月峰之住庵
簷前雨細山添緑
簾外花飛雪散香
況復主人談論妙
忘帰終日酔金觴
龍公美
鷲峰
梅の月
定雅
憩長喜庵
秋烟漠々
水冷々
物色清奇
渓上亭
試見天公
存画癖
猶成一幅
翠堆屏
三峯
荷田信郷

むかし
上人の
華園には
弥生の比
桜花多く
咲乱れて
遊客
群来り
しか
今ハ双林寺に
形ばかりの
蹟のみ
のこされ
しも
東海の
ごとく
桑田と
なると
いつハ
あはれなる
やつなり




雙林寺 文阿弥
林泉 相阿弥作


将軍塚を見て
君が代や将軍塚のかんこ鳥
治若 烏堂
百山嶺
花頂山 将軍塚

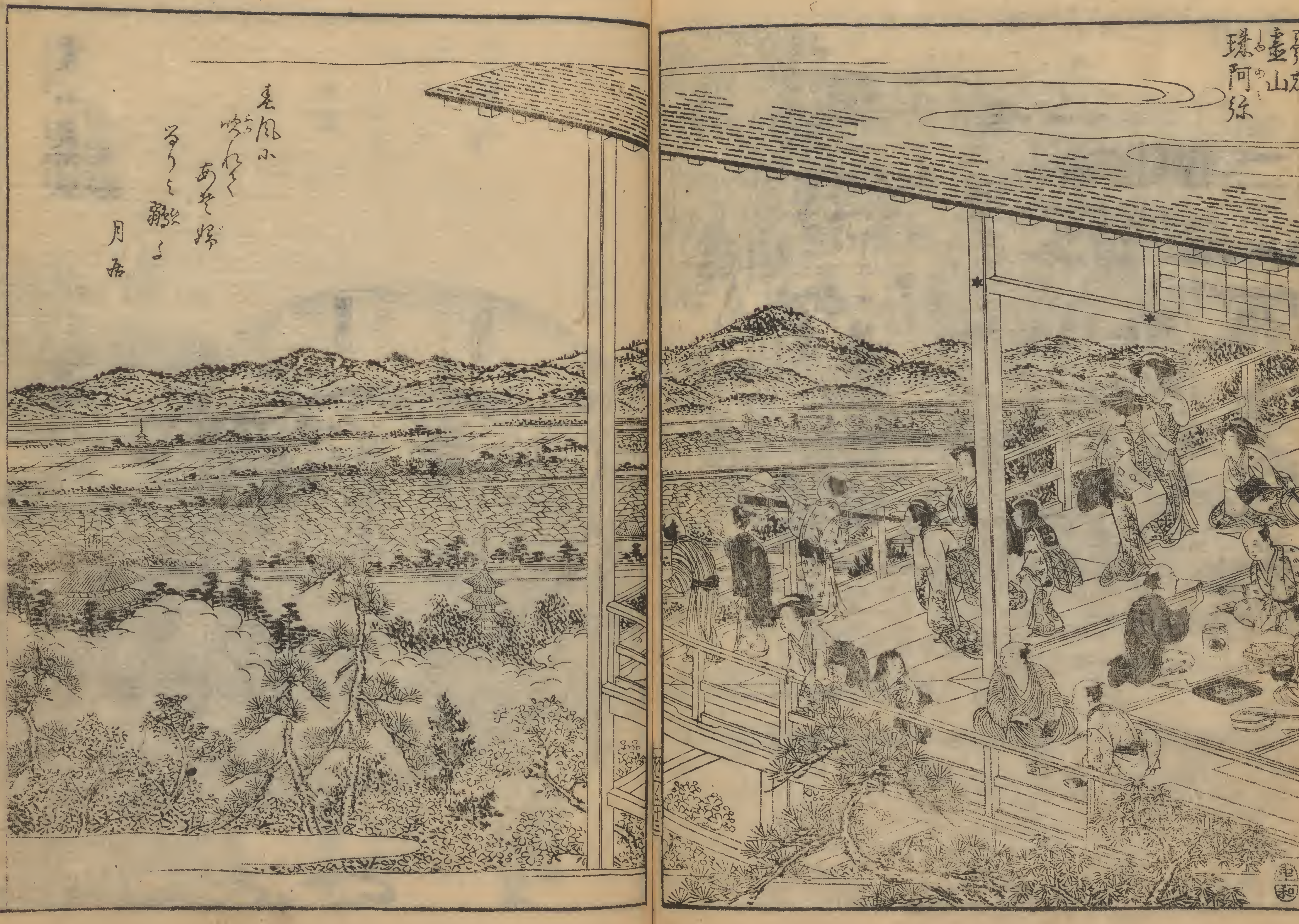


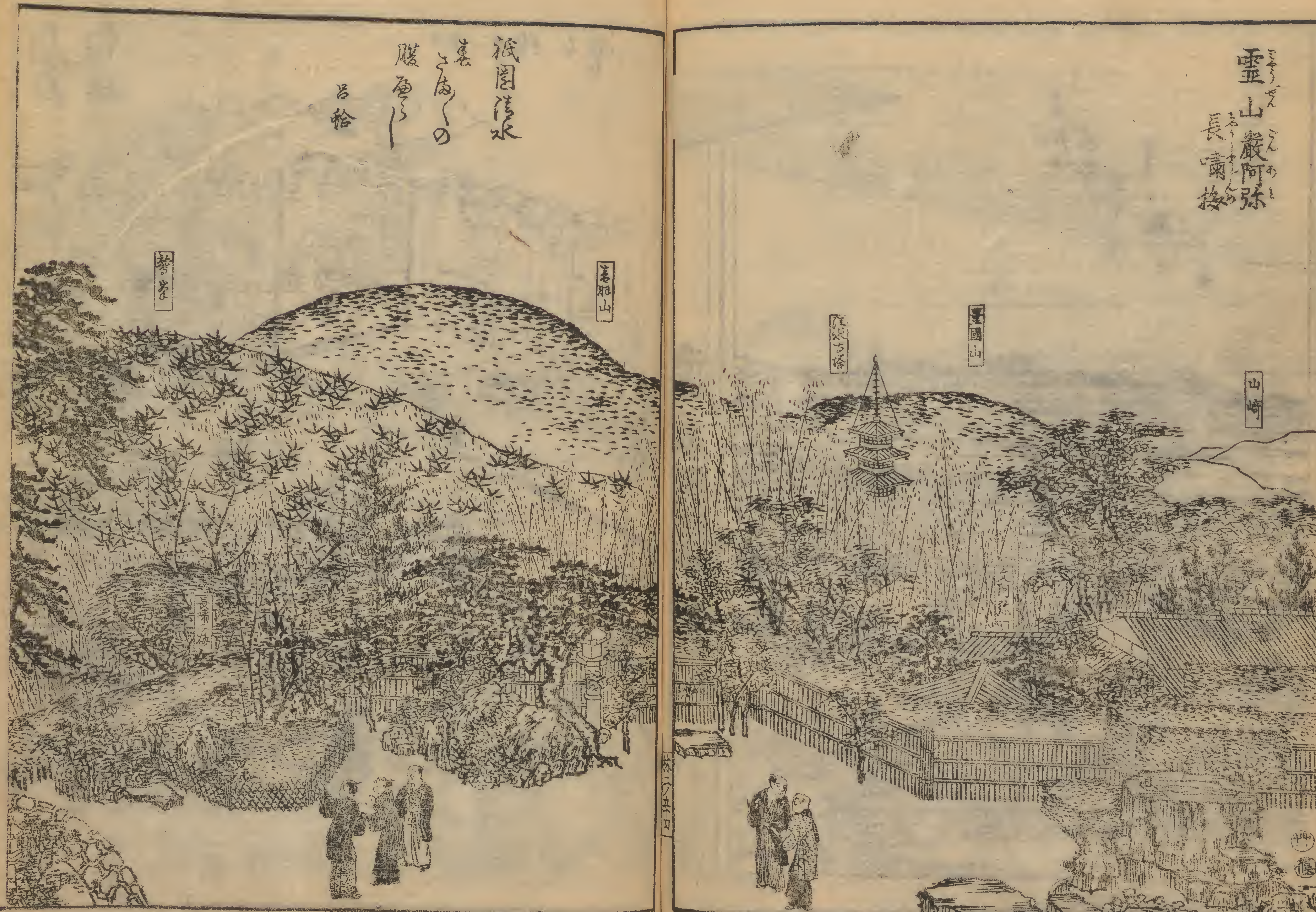
祇園御輿濯
邌物
其一
文鳴画

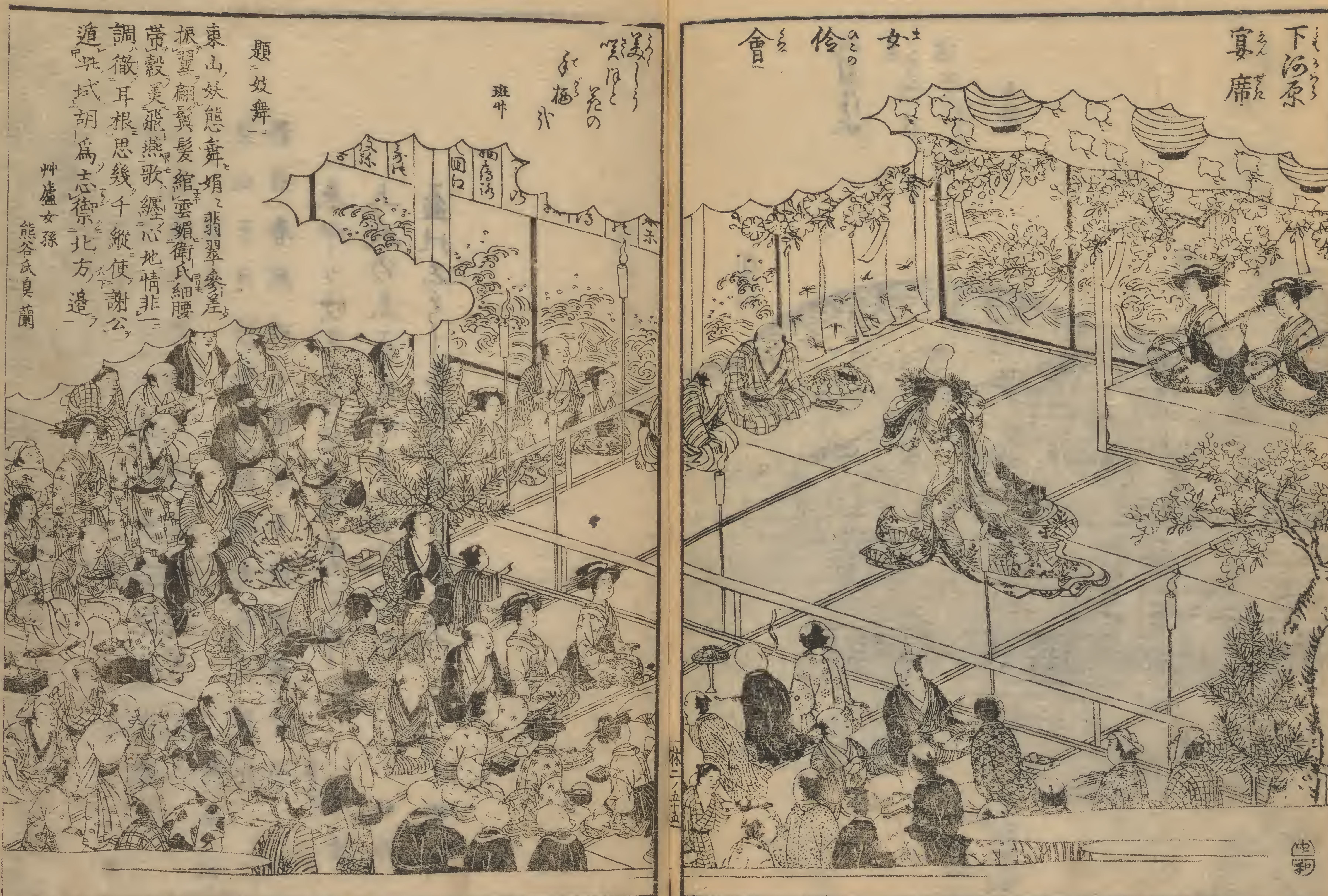

其二


霊山(りやうぜん)
叔阿弥(しゆくあミ)
花の風
かろく来てふけ
酒の泡
嵐雪

Ornamental nails




霊山巌阿弥
長嘯
祇園清水
山崎


下河原宴席
士女伶會
美しう咲ほと花の紅梅か
班竹
題妓舞
東山妖態舞娟〻翡翠參差
振翼翩翾髪綰雲媚衛氏細腰
帶縠美飛燕歌纒心地情非
調徹耳根思幾千縱使謝公
遁跡拭胡爲志衞北方邊
艸盧女孫
熊谷氏貞蘭
中和

霊山（りやうぜん） 山頂に寺あり正法寺といふ山槐記云治承二年十一月佛寺七十四箇所の其一とす 藤明衡霊山に遊ぶの詩無題詩に見へたり和哥拾遺集及び新続古今集に見ゆ又山中に長嘯子の宅址あり

東山冬景　　三峯　　荷田信郷

樓々閣々雪如塵一様瑶光望裡新
不是東山謝家妓婆娑縞袂素裙人

東山　　梅華仙

東山三月競繁華紅錦青羅人似花
終日春風吹不落芬芳腦殺幾千家

京中ゟ吹上ゟのほる落葉かな　　浩天 文磨

上人の木履紙かるゝん夕しくれ　　竹翁

盃丸志そし志川世ゝや夕かすみ　　轍士

都林泉名勝圖會巻之貳終